

寺部村附第9・中西第3遺跡

－新山梨環状道路建設に關わる発掘調査報告書－

2004. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

寺部村附第9・中西第3遺跡

2004. 3

序

本書は、山梨県土木部による新山梨環状道路建設工事に先だって、山梨県埋蔵文化財センターが平成13・14年度に発掘調査を実施した寺部村附第9・中西第3遺跡の発掘調査報告書であります。

遺跡は、甲府盆地西部の御勅使川扇状地の先端に近い南アルプス市寺部に位置し、標高は265mの緩やかな南東向きの斜面に立地しています。また、遺跡の西側には南アルプスの白根三山やその前山の梯形山がそびえ、東側には甲府盆地を挟んで御坂山塊とその上に壯麗な富士山を望むことができる眺望の良い地域であります。

遺跡の周辺には甲府盆地西部の古墳時代前期の拠点的な集落で、発見された住居跡が100軒を超えるような村前東遺跡、古墳時代から奈良平安時代の集落遺跡である新居道下遺跡などが存在していますので、弥生時代以降に水田開発がなされ、以降、集落が次第にその規模を大きく展開していった様相をうかがうことができます。

本遺跡の発掘調査では、道路幅の範囲で約8,000m²を対象として行い、平安時代から近代までの遺構と遺物が発見されました。平安時代の遺構は堅穴住居跡2軒と土器捨場1ヶ所が検出され、この他に溝18条、井戸1基、土坑31基、水溜遺構と考えられるもの3基等がありました。これらの溝や土坑は江戸時代から近代のものが多く、板で囲われた水路と水溜遺構の近くでは江戸時代後期の陶器片が出土しています。

このような遺構や遺物の状況から、平安時代の生活や扇状地と湿地の開発の様子を把握することができたとともに、平安時代から今日まで、地下水位の高いこの地域が、水を制するために様々な工夫をこらしていたことが明らかになった意義は大きいものと思います。本書が地域の歴史を解明するために、少しでも役に立つことができれば、望外の喜びであります。

末筆ではありますが、本調査におきまして様々なご協力を賜りました関係機関各位、並びに発掘調査・整理作業に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。

2004年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 渡辺 誠

例言・凡例

- 1 本報告書は、山梨県南アルプス市（旧若草町）寺部に所在する、寺部村附第9・中西第3遺跡の平成13年・14年度に実施した発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を、山梨県教育委員会が山梨県土木部より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施した。
- 3 本報告に関わる出土品および写真、記録図面等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管している。
- 4 自然科学分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。
- 5 遺物の写真撮影は、トータル・アイの清水守氏に委託した。
- 6 本書の編集は、小林広和、猪股一弘が行い、執筆は小林、猪股の合議の結果による。
- 7 発掘調査および整理作業において、次の方々・機関によりご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。
南アルプス市教育委員会（旧若草町教育委員会）
田中雄二、宮沢公雄
- 8 本報告書の挿図等に関する指示は下記のとおりである。遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に次のとおりである。遺構・遺物の縮尺は基本的に下記のとおりであるが、資料の大きさにより適宜、縮尺を変化させてある。
遺構 住居跡1:40 土坑1:40 井戸1:20 溝1:80
土器集中区1:40 全体図1:400（水平1:200、垂直1:20）

目 次

序 文

例言・凡例

目 次

第 1 章 調査の経緯と調査の概要	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 発掘調査の概要	1
第 3 節 調査組織	2
第 2 章 遺跡の立地と環境	3
第 1 節 自然的環境	3
第 2 節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第 3 章 発見された遺構と遺物	6
第 1 節 層序	6
第 2 節 遺構と遺物	6
まとめ	18
付編 寺部村附・中西遺跡の自然科学的分析	50

挿図目次

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 第1図 本遺跡の位置と周辺遺跡分布図 | 第20図 4区, 1号住居跡出土遺物(1) |
| 第2図 寺部村附第9・中西第3遺跡全体図 | 第21図 4区, 1号住居跡出土遺物(2) |
| 第3図 1区, 全体図、遺物平面・垂直分布図、
発掘区西壁セクション | 第22図 4区, 1号住居跡出土遺物(3)
2号住居跡出土遺物(1) |
| 第4図 1区, 1~5号溝、1~4号土坑実測図 | 第23図 4区, 2号住居跡出土遺物(2) |
| 第5図 1区, 6~8溝、5~13号土坑、
1~3号水溜実測図 | 1号土坑出土遺物
土器集中区出土遺物(1) |
| 第6図 1区, 1・3号水溜実測図 | 第24図 4区, 土器集中区出土遺物(2) |
| 第7図 2区, 全体図、遺物平面・垂直分布図、
1・2溝、2号土坑実測図 | 第25図 4区, 土器集中区出土遺物(3) |
| 第8図 2区, 1・3号土坑、3~8溝実測図 | 第26図 4区, 土器集中区出土遺物(4) |
| 第9図 3区, 全体図、遺物平面・垂直分布図、
西壁セクション | 第27図 3区, 2号溝出土遺物(1) |
| 第10図 3区, 1号溝実測図 | 第28図 3区, 2号溝出土遺物(2) |
| 第11図 3区, 2号溝実測図 | 第29図 3区, 2号溝出土遺物(3) |
| 第12図 3区, 1~12号土坑実測図 | 第30図 3区, 2号溝出土遺物(4) |
| 第13図 3区, 1号井戸・15号土坑実測図 | 第31図 3区, 2号溝出土遺物(5) |
| 第14図 3区, 第13・14号土坑実測図 | 第32図 3区, 2号溝出土遺物(6) |
| 第15図 4区, 全体図、遺物・垂直分布図 | |
| 第16図 4区, 土器集中区・垂直分布図 | |
| 第17図 4区, 1号住居跡・遺物分布図 | |
| 第18図 4区, 1号住居跡カマド実測図、
2号住居跡実測図 | |
| 第19図 3区, 1号井戸出土遺物 | |

図版目次

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 図版1 1区 全景・土坑及1~5溝 | 図版7 4区 1・2号住居跡 |
| 図版2 1区 土坑・水溜・6~8溝 | 1号土坑・1号住居跡出土遺物 |
| 図版3 1区 水溜 | 図版8 4区 1号・2号住居跡出土遺物 |
| 2区 全景・3~7溝 | 図版9 4区 土器集中区出土遺物 |
| 図版4 3区 全景, 1号溝 | 図版10 3区 2号溝出土遺物 |
| 図版5 3区 2号溝・1~10号土坑 | 図版11 3区 2号溝出土遺物 |
| 図版6 3区 土坑・1号井戸 | |
| 4区 全景 | |

第1章 調査の経緯と組織

第1節 調査に至る経緯

今回の、調査にかかる地域は、旧若草町教育委員会が主体となって行われた町内の分布調査により、古墳から平安にかけての土器が発見され遺跡が確認されている。

さらに本遺跡は、今回の発掘調査に先行して、山梨県土木部による新環状道路建設に伴う遺跡確認の為の試掘調査が旧若草町教育委員会（現南アルプス市）により実施され、1・2区では中世の溝状遺構が、3・4区では、平安時代集落の一端が確認された。

平成15年4月25日、本遺跡を通過する新環状道路建設工事打ち合わせが行われた。それを受け、山梨県教育委員会では、調査体制を整えることとなった。

発掘調査は、平成13年8月20日から13年10月の2ヶ月間、平成14年7月1日から15年1月31日の6ヶ月間（民家移動延期の為、11月中は調査中断）、の2回を実施した。

第1次調査

平成13年8月14日 文化財保護法第58条2による発掘通知を山梨県教育委員会に提出

平成13年10月16日 埋蔵文化財発見通知を小笠原警察署に提出

第2次調査

平成14年7月1日 文化財保護法第58条2による発掘通知を山梨県教育委員会に提出

平成15年1月31日 文化財発見通知を小笠原警察署に提出

第2節 遺跡の概要

今回の発掘調査で検出された遺構は、平安時代に属する竪穴住居2軒、平安時代土坑墓2基、土器集中区1箇所、井戸1基、水溜3基、土坑29基、溝16条、用水路(1・2号溝)2条である。特記すべきは、発掘調査区中央部の標高363.3mの位置に傾斜変換線が認められたことである。

平安時代に属する遺構関係では、住居2軒と、何らかの祭りに関連したと思われる遺物集中区は、変換線上位位置に展開して、それ以下では平安時代の土坑墓2基が検出されたのみであった。このことは、今回の調査区の中央部に存在する傾斜変換線付近が、周辺遺跡の集落の端部であるとの解釈を可能にした。

調査第3区では、江戸末期の生活用水路が確認された、調査中央南北に走る1号溝、それに直行して交わる2号溝が確認され、2号溝は、昭和30年代に改修された息が長いものであった。

調査区1・2区は、水性堆積の軟弱な地盤に、緩やかな流れの侵食作用により作出された幅の狭い自然溝が十数条、南北に検出される。遺物はいずれも3cm前後の小破片で、自然溝からの出土は皆無であり、水性堆積土の遺物包含層からが大半を占めている。

第3節 調査組織

調査体制

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者

		13年度	14年度		
副主幹文化財主事	小林 広和	○	○		
主査文化財主事	猪股 一弘		○		
非常勤嘱託	楠間美季江	○			
発掘作業員	今村 貞雄 二宮 明雄 佐久間篤子 井上 時男 佐久間春江 金丸 亨 原田 佳子	時田 黙 河野 逸広 大越すず子 望月 忠 長谷川りん 石川 千年 座間 昭子	斉藤 重信 山本三重子 石川 久子 渡辺 旭光 平嶋 弘子 中村 謙一 山本 愛	小野 嘉雄(故) 福島 祥子 神沢 正孝 末木 義光 平嶋 純一 鈴木 政一 山本 紗子	佐久間 等 眞道みゆき 花形 三男 加藤 秀代 土橋 享一 飯室めぐみ
整理員	新津 多恵	清水 真弓	小林 順子		

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 自然的環境

本遺跡(★)の立地する旧若草町(現南アルプス市)は、甲府市の南西約12kmの所にあり、盆地を縦断する釜無川の右岸に位置する。町域は、東の釜無川と西の櫛形山巣層から流下する滝沢川に挟まれ、国内屈指の規模を誇る扇状地である御動使川扇状地(標高約270m)の扇央から扇端部、及び釜無川の沖積低地(氾濫原)に広がっている。町内には山地ではなく、極めて平坦な地形的特色を持っているが、より細かく見していくと、御動使川古期扇状地、その上に形成された滝沢川の2次の小扇状地、土石流堆積などの小扇状地上の微高地(自然堤防)、釜無川の沖積低地など、いくつかの地形に分類することができる。

御動使川古期扇状地の形成時期・過程は不明だが、褐色の火山灰質粘土層と、小礫を主とする疊層の互層が厚く堆積し、古い様相を示すという。東端部の崖線上には縄文遺跡が立地し、扇状地及びその崖線形成が、縄文時代よりもかなり古い時期であったことが窺える。

2次の小扇状地は、旧櫛形町(現南アルプス市)小笠原付近を扇頂とし、御動使川古期扇状地を覆う泥流堆積によって形成されたものという。この小扇状地上には、滝沢川に沿う左岸の十日市場、加賀美地区にみられるように滝沢川に平行して幅広く土石流堆積した微高地が発達している。

沖積低地は、鏡中条・藤田地区と釜無川との間に広がる、釜無川のたび重なる氾濫によって生じた氾濫原とも洪溢平原とも呼ばれる地域で、非常に平坦な地形で水の豊かな水田地帯である。

本遺跡は、御動使川古期扇状地扇端部に立地し、全体的には北西から南東に向かって、緩やかに傾斜する緩傾斜土地に存在している。扇端部では堆積物の粒子は細かく、堆積量も少ない。砂礫層にしみ込む伏流水も浅く、ついには自然に湧水するようになる。この湧水は、扇端部で弧状に分布しているので湧水列(湧水帯、地下水自噴帶)と呼ばれている。

この湧水列が、本遺跡付近を東西に走っていて、これを境にほぼ上手は畑地に、下手は水田地帯になっている。ただし、現在では果樹栽培が急速に進行しているので必ずしも当てはまらない。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

旧若草町も含め、釜無川右岸における峠西地域の遺跡は、近年分布調査が詳細に行われている。これらの調査をもとに、この地域での遺跡の分布状況や遺跡の立地及び動態について詳細な検討がなされている(保坂1990「原始・古代の遺跡」『若草町誌』)。また、国道改築工事や県道垂崎・櫛形・豊富線、中部横断自動車道、甲西バイパス建設などに伴う調査により、多くの遺跡が発見され、より詳細な実態が解明されつつある。

旧石器時代まで遡る遺物は、旧若草町のような扇状地上では発見に至っていないが、近くの旧櫛形町の市之瀬台地上では、数点採集されている。特に、六科丘遺跡・長田口遺跡・長田A遺跡では、ナイフ型石器などが出土していて、この台地に昔から人類が生活していたことがわかる。

縄文時代になると山地、台地、山地・台地と扇状地との境界にある緩斜面などに遺跡が多く拡大分布するが、わずかに扇状地やその崖線上にも認められる。台地上の曾根遺跡・大畑遺跡(1)では早期・前期の遺物が、上の山遺跡・古屋敷遺跡では中期の遺物が発見されている。また、中期中葉の環状集落が調査された鶴野師屋遺跡(2)は台地下の扇状地に、後期を中心とする遺物が採集されている清水坂遺跡(3)は、崖線上に立地している。しかしながら、旧若草町内には今のところ縄文時代の遺跡は発見されてない。これはまだ、人々が生活を低湿な地域よりも、乾燥した高地や台地を中心に求めたものと理解される。



第1図 本遺跡の位置と周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|----------------|----------------|-----------|------------|--------------|
| 1. 大畠遺跡 | 2. 鑄物師屋遺跡 | 3. 清水坂遺跡 | 4. 十五所遺跡 | 5. 村前東A遺跡 |
| 6. 溝呂木道上遺跡 | 7. 二本柳遺跡 | 8. 向河原遺跡 | 9. 住吉遺跡 | 10. 油田遺跡 |
| 11. 中川田遺跡 | 12. 大師東丹保遺跡 | 13. 前原G遺跡 | 14. 新居道下遺跡 | 15. 寺部村附第6遺跡 |
| 16. 角力場第2遺跡 | 17. 物見塚古墳 | 18. 上村古墳 | 19. 狐塚古墳 | 20. 八幡遺跡 |
| 16. 今井前遺跡第4遺跡 | | 22. ノ木遺跡 | | 24. 宮沢中村遺跡 |
| 25. 条里型土地割推定区域 | ★寺部村附第9・中西第3遺跡 | | | |

弥生時代に入ると、縄文時代で中心的な居住地であった台地などの遺跡の割合が減少し、徐々に扇状地、微高地、冲積低地での遺跡の割合が増加するようになってくる。それと共に、旧若草町内並びにその周辺にも多くの遺跡が発見されようになってくる。例えば、後期方形周溝墓や住居跡、中期条痕文土器片が検出された十五所遺跡(4)、水田とみられる跡や中期条痕文土器片が検出された村前東A遺跡(5)などがある。いずれも扇状地扇央部から扇端部にかけての遺跡である。さらに、微高地から冲積低地にかけて、浮線文土器片が検出された溝呂木道上遺跡(6)、中期の土器・包含層が確認された二本柳遺跡(7)、中期の小区画水田跡が見つかった向河原遺跡(8)、後期の住居跡が認められた住吉遺跡(9)を始め、同じような地域で、油田遺跡(10)、中川田遺跡(11)、大師東丹保遺跡(12)などで水田跡、祭祀跡などの資料が発見されている。このように、この時代頃から稻作のために生活域を拡大した形跡が窺える。

古墳時代では、この地域での拠点的集落ともいえる、140軒を超える住居跡が確認されている村前東A遺跡(5)の調査が行われ、東海系のS字状口縁台付壺が多数出土している。また、後期の遺構が検出された前原G遺跡(13)もこの地域に占地する。旧若草町内では、前期の集落が発見された角力場第2遺跡(14)、中期での円形周溝墓が出土している寺部村附第6遺跡(15)、後期では、扇状地扇端部の湧水列付近で、大規模な集落跡が検出された新居道下遺跡(16)が立地する。

一方、古墳の分布状況だが、旧若草町では寺部地区に塚が3基あるが、いずれも古墳ではなく中世以降に造られたとされる十三塚や富士塚等である。しかし、周りの地域では、多くの古墳が明らかにされている。前・中期古墳としては、物見塚古墳(17)、六科丘古墳などで、竪穴式石室などをもち市之瀬台地上など限られた地域に存在する。又、横穴式石室をもつ上村古墳(18)、狐塚古墳(19)が属する後期古墳は、甲府盆地周辺地域にみられる。これは当時の中央集権の力が部族長のレベルにまで至り、ムラが再組織されて、小扇状地上の微高地にも水田耕作を開発推進する有力者が存在したと考えられている。このような動態は、後の条里型土地割(25)に引き継がれた可能性がある。

奈良時代になると、この地域での遺跡の確認が少なくなる。分布状況は、御動使川古扇状地扇端部に集中する。湧水列付近に立地する新居道下遺跡(16)の集落遺跡をはじめ、八幡遺跡(20)、今井前遺跡第4遺跡(21)などがある。

平安時代では、再び遺跡の数が増加する。御動使川古扇状地上の遺跡に加え、滝沢川の小扇状地の微高地、冲積低地への遺跡の進出が目立つ。扇状地扇央部から扇端部にかけて、角力場第2遺跡(16)、新居道下遺跡(16)、鉢物師屋遺跡(22)、木造跡(23)などで集落跡が見つかっている。微高地や冲積低地では、竪穴住居跡や堀建柱建物跡が検出された枇杷B遺跡(24)、水田跡が検出された二本柳遺跡(7)、中川田遺跡(11)がある。また、この時期に関わる遺構として、旧若草町の加賀美や藤田地区にみられる条里型土地割の問題があるが、いつが起源なのかという問題に関しては、古墳時代後期以後の水田開発の延長から考え、奈良時代頃にその起源を求めるという見方(保坂1990『若草町誌』)と平安時代後期以降の荘園経営に関係しているという考え方(中山誠二1996『条里制研究』12)がある。いずれにせよ背後に強力な権力のある組織が存在したと考えられる。

中世以降に関しては、戦国時代の井戸、溝や法善寺の子院の一つである中世寺院「福寿院」跡を調査した二本柳遺跡(7)、鎌倉時代の建物跡、木製品が出土した大師東丹保遺跡(22)、13世紀後半に遡る常滑焼大甕が土坑に埋蔵され見つかった溝呂木道上遺跡(6)がある。近世では、江戸時代の集落が検出された宮沢中村遺跡(24)が立地する。このように各時代における遺構・遺物が確認され、この地域での人々の生活の歴史的変遷を知る上で、貴重な資料が発見されている。それをもとに、今まで以上により多くの事の解明が期待されている。

(猪股一弘)

第3章 発見された遺構と遺物

調査は、県土木部の依頼により、発掘区を4区に区画して、建設工程の早い1区の南側区域から順次おこなうこととなり、平成14年度では1区および3区の一部(発掘区は水没の為翌年調査)を、平成14年度には、2区から4区の調査を行った。

第1節 層序

本遺跡は、御動使川古期扇状地の端部に位置するため、土層は細かい水性堆積物が主体をなしていて、しかも量は少ない。

4区・西壁(傾斜変換線上位)

第I層 黒褐色 5mmの小礫炭化物土器片含む。

第II(IV)層 黒褐色 粘土質 にぶい黄褐色土含む。(礫、焼土含む。)

第III層 黒褐色 5~1mmの小礫含む。

3区・西壁(傾斜変換線下位)

第I層 黒褐色 焼土粒子および小礫を含む

第II層 黒褐色 にぶい黄褐色 焼き土粒子小礫はI層より多くなる。

第III層 黒褐色 にぶい黄色褐色を全体に含む。

第IV層 黒褐色 にぶい黄色褐色を少量含む。

1区・西壁(調査区最下部)

第I層 耕作土

第II層 暗茶褐色 木炭・土器粒子含む。

第IV層 暗灰褐色

第V層 砂層

第VI層 黒褐色 繊密で若干の砂含む。

第2節 発見された遺構

1区の調査結果

1区は、今回の調査区の中で、最も低位に位置する地区で、表土を剥いだ時点で湧水があり、常に水浸しの状態であるが、水抜を施して精査を行った。溝8条、土坑13基、水溜3基が検出された。

水溜1・2号(第5・6図)

水溜1号、水溜2号は平面プランは共に整った円形を呈して、東西に走る6号溝と連結し、互いに機能しているものと思われる。8号溝は北側より水溜2号に合流する。水溜1・2号、溝6・8号は、排水あるいは水溜による水利用の施設が考えられる。時期は、1号水溜より近代以降の瓦片を含む礫等が検出されている点、水溜、6・8号溝の覆土は、第3図・セクション図の2層にあたり上面に確認されることより、現代に限りなく近い所産とされる。

水溜3号(第6図)

椭円形の土坑を掘削後、円形に石組が丁寧に積まれる。出土遺物無し。使用目的不明。

溝1~8号(第4図)

前記した調査経緯で触れた、試掘結果での中世溝と想定されていた遺構状のものであるが、全面調査の結

果は、方向が一定であり、途切れているが1～3条の溝に収束が可能であること。不規則な形態を示し一定していない。溝に伴う杭等の人的工作物が検出されないなどの事由により、本地区的溝群は、第3層の軟弱な水成堆積の地盤に緩やかな水の流れの際に削成された自然水路の痕跡と断定した。

土坑(第3・4・5図)

大小の13基が検出されている。大半のものは時期不明であるが人為的によるものとされる。土器などの遺物の出土はない。

2区の調査結果

1区の東側に隣接して、調査区の低位置に当たり、溝8条、土坑2基が検出された。西側部は、1区同様の水性堆積の地盤に、土坑、溝等が数ヶ所検出され1区の延長上として把握されたが東側のトレンチを設けた部分では(第7図)、地盤が疊層に移行して、遺構、遺物は検出されなかった。

土坑(第7・8図)3基が検出された。2号土坑は、規模は2m前後を有し、平面形方形、断面形箱形を呈し比較的整った形状を示す。1号土坑は不規則な平面形を呈し、3号土坑は円形を呈する。これらの土坑からは土器等の遺物は検出されず、時期、使用目的は不明である。

溝1～8号(第7・8図)

見かけは、溝8条が検出された様相を呈する。これらは、1区の溝群同様に、軟弱な水成堆積の地盤に緩やかな水の流れに伴って削成された不規則な形態、同一方向を示す自然水路痕である。1・2・3・4・8号は途切れているが、1区の溝群の南端部を形成するものと判断される(第2・8図)。

1・2区では、近代以降の水溜、溝以外では、遺構は検出されず、小破片の土器が平安時代を中心として、古墳時代から中世遺物が1区東部を中心に2区北部、南部に検出された。これらは3層の茶灰褐色層を中心に包含層を形成するが、土砂の流れの中での流れ込みとしての状態が、第2・3図より示唆される。

3区の調査結果

傾斜変換線から2号溝の範囲である。地盤は1号溝を境に西側は水成堆積層、東側は疊層に分かれ、遺構は掘削可能な西部に偏る。井戸1基、土坑15基、用水路(溝1・2号)2条が検出される。

井戸・水溜遺構(第13・14図)

1号井戸は、ほぼ円形プランで断面錐形を呈する。井戸としたが本来的な目的は水溜的な機能が与えられる。北側壁に整然とした石組が認められるが、他は素掘状であり、本施設の廃棄と同時に、石材が抜かれた可能性も残す。遺物は11～12世紀中心に杯、カメ類の小片が出土する。

1号井戸に、近似した状況を呈するものに、13・14・15号土坑がある。これらは円形、不正形であるが、掘り込みは1号井戸に近い。またこれらは石材の稀な水性堆積土に掘削されているが、土坑中からは中に放り込まれた状態の多量な大型疊が出土する。機能的には、水溜が与えられる(第11図)。

1・2号土坑(第12図)

人骨等は消滅して存在しない。共に長軸2、3mを計測する。1号からは、皿1点(DX期)が出土する事実から9世紀第4四半期の年代が与えられる。

1・2号溝(第10図)

変換線下位の標高263付近の湧水を源としてほぼ南北に流れて2号溝に直角に交わる。水源付近では湾曲するが中央以下では直線的となる。溝脇には杭列がつらなる。使用時期は、出土磁器より江戸末期が当たられる。2号溝は1号溝と直角に交わりほぼ東西に流れる。使用時期は、出土磁器より江戸末期明治～昭和初期とされるが、昭和30年代に改修されて、木枠が組み込まれている。

3区では、住居跡は検出されず土坑墓、井戸あるいは水溜の類が認められた。遺物は、調査区西部、東部

に散在する。その出土状況は小破片であり1・2区同様に堆積土との関わりに強く影響されたものであるといえる。

4区の調査結果

標高263、5mに傾斜変換線が認められ、本区と下位地区(1・2・3区)に分かれる。本区は遺跡の集落端に位置付けられ、住居跡2軒、土器集中区、土坑1基が検出された。

土器集中区(第15・16図)

ほぼ変換線上に位置して、発掘区南西部に当たる。今回の調査では、遺構外での本格的な遺物の検出地点である。現状では2×6mの範囲に認められたが、その範囲は発掘外に伸びている。焼土と共に、甲斐型土器の暦年代(1992・瀬田)、IX・X期の杯、壺を中心にXI期までが、投げ捨てられるように出土して、接合関係例も認められる。

第1号住居跡(第17図)

調査区北西部に検出される。平面形は隅丸方形である。床面は、全体的に平坦でしっかりと踏み固められているが、貼床は確認されない。また、柱穴、周溝の確認を行ったが検出にはいたらなかった。

住居中央部と竪上部および東壁は、本調査に先行して行われた試掘によりすでに削平され消失している。竪は残り下位の焼土より観察すると、東壁やや南よりに設けられている。覆土は、2層であり床面に対して平行に認められ、住居廃棄の際に埋め戻された可能性が高い。遺物は、住居内全体に検出されるが、とくに竪内に集中する。住居構築時期は、甲斐型土器の暦年代(1992・瀬田)IX・X期の杯、壺が検出しており、9世紀第4四半期～10世紀第1四半期と考えられる。

第2号住居跡(第18図)

1号住居跡の、北側10mの位置に存在する。平面形はやはり隅丸方形である。床面は、地山が砂層であり、貼床の有無は確認されないが床表面は固く平坦に整えられている。竪は東壁やや南寄りに設けられ、煙道が認められる。柱穴、周溝の検出に努めたがいたらなかった。遺物は甲斐型土器の暦年代(1992・瀬田)VII、IX期で主にIX期に集中する。このため、構築時期は、9世紀第4四半期に求められる。

4区では、変換線上位置に住居跡2軒、土器集中区を検出したわけであるが、変換線下位には住居跡、および、まとまった遺物の検出もなく、この地点が遺跡内の集落区とそれ以外の区域の境界線としての認識が可能となつた。

土器觀察表

博認 番号	造物 番号	造記 番号	出土 地点	器形	時期	残存率	法量(cm)(現存値) 口径、器高、底径	焼成	胎土	色調	口縁 部型	蓋口 部の 状況	調整技法	
19	1	105	一号井戸	环	11世紀 前後	底部破片	— (1.4) (7.5)	やや 良	赤色粒子 赤色砂粒	にぶい 褐色	—	—	底部回転系切り後無調整、信州 系?	
19	2	32107	一号井戸	カメ	12世紀 前後	口縫部 破片	(26.0) (5.8)	一	良	赤色粒子 白・黒砂粒	褐色	—	外面スス付着 内面外面ロクロ ナデ外面スス付着	
19	3	96	一号井戸	鍋	12世紀 前後	口縫部 破片	— (3.3)	一	良	赤色粒子 黒母	褐色	—	外面スス付着 内面外面ロクロ ナデ	
19	4	109	一号井戸	カメ	12世紀 前後	口縫部 破片	(31.0) (7.9)	一	良	白色粒子	灰白色	—	—	
19	5	1235	一号井戸	釜	12世紀 前後	底部付近 の破片	— (6.2)	一	良	赤色粒子 白・黒砂粒	褐色	—	—	
19	6	148	一号井戸	深煎器 カメ	中世後半	破片	— (5.6)	一	良	白色砂粒	灰色	—	—	
19	7	106	一号井戸	須恵器 カメ	中世後半	破片	— (3.5)	一	良	白色砂粒	灰色	—	—	
20	1	435 ~ 435 - 463 カマド一括	一号住	环	9期	95%	11.7	4.1	3.8	良	赤・黒色粒子 小石少量	明赤 褐色	丸彫	35% 内面体部に暗文、底部と周辺斜 位手持ちハラケズリ
20	2	274378	一号住	环	10期	50%	12.4	3.2	(4.8)	良	赤色粒子 赤・黒砂粒	褐色	玉縁	26% 外面体部斜位手持ちハラケズリ 内 面暗文あり 底部全面へラケズリ
20	3	104 ~ 105 - 151	一号住	环	9期	80%	12.1	4.1	4.4	良	赤色粒子 赤・黒砂粒	褐色	丸彫	34% 底部と周辺斜位手持ちハラケズ リ
20	4	380	一号住	环	9期	20%	(12.5)	4.0	(4.8)	良	赤色粒子 白・赤砂粒	褐色	丸彫	38% 外面底部全面体部斜位手持ちヘ ラケズリ 内面体部暗文
20	5	95 ~ 102 一括	一号住	环	11期	40%	12.2	(4.2)	—	良	赤・黒色粒子	にぶい 赤褐色	丸彫	— 外面体部斜位手持ちハラケズリ? 内面回転ヘラケズリ?
20	6	297400 436 436 439 440 カマド一括	一号住	环	9期	55%	12.0	4.0	4.4	良	赤・黒色粒子 黒目立すか	にぶい 黒褐色	丸彫	37% 外面体部斜位手持ちハラケズリ 内面体部暗文あり 底部全面へラケズリ
20	7	227291 292	一号住	环	9期	30%	(11.7)	4.0	(4.5)	良	赤色粒子 白・黒砂粒	褐色	丸彫	38% 底部回転糸切り後ヘラケズリ 後周 辺斜位手持ちハラケズリ
20	8	128	一号住	环	10期	20%	(15.5)	4.5	(6.5)	良	赤・黒粒子 砂粒含む	明赤 褐色	丸彫	43% 内面体部暗文、底部回転ヘラケズ リ 体部回転ヘラケズリ
20	9	カマド一括	一号住	环	10期	破片	— (1.5)	(5.5)	—	良	赤色粒子 白・赤砂粒 赤母	褐色	—	外表面内面体部とも糸切り後無調整
20	10	388	一号住	内巻环	11期	破片	(14.6)	(3.8)	—	やや 良	白色粒子	外面灰 褐色	—	外表面スス付着糸切りナデ 内面暗 文のミガキあり 信州系?
20	11	417423 437443	一号住	内巻环	—	破片	(15.2)	5.4	(4.8)	良	赤色粒子 白・赤砂粒 赤母	外表面 褐色	丸彫	32% 外面体部回転ヘラケズリ 内面体 部に暗文と縦線のミガキ 糸切り後ヘラケズリ 信州系?
20	12	一括	一号住	环	11期	破片	— (5.0)	2.4	—	良	赤・黒色粒子	褐色	—	内面赤・黒こぶし形へラケズリ 底 部回転糸切り後手持ちハラケズリ
20	13	一括	一号住	内巻环	11期	破片	(14.0)	(4.2)	—	良	白・黒色砂粒	玉縁	—	体部回転ヘラケズリ
20	14	99101 101 T P	一号住	高台 付脚	平安	50%	(16.6)	5.1	7.0	良	白色粒子 白・黒砂粒	灰白色	—	灰釉陶器 三ヶ月高台
20	15	一括	一号住	环	10期	破片	— (3.0)	4.6	—	良	赤・黒色粒子	褐色	—	外表面下半斜位手持ちハラケズリ 底 部回転糸切り後手持ちハラケズリ
20	16	106	一号住	环	11期	破片	— (0.9)	(4.4)	—	良	赤・黒色粒子	褐色	—	内面体部回転ナデ 底部と底部 周辺手持ちハラケズリ
20	17	一括	一号住	高台 付脚	—	破片	— (1.9)	(8.4)	—	良	黑色粒子	灰白色	—	三ヶ月高台 灰釉陶器
20	18	一括	一号住	环	10期	破片	— (1.8)	(5.0)	—	良	赤色粒子 白・黒砂粒	褐色	—	内面体部回転ナデ 底部全面手 持ちハラケズリ
21	19	159 ~ 162	一号住	皿	10期	ほぼ充 形	13.6	2.3	4.8	良	赤色・黒 色粒子	褐色	—	釉膜剥離2つあり 内面へこみで 凹凸あり 脚部2つあり 脚部2つあり 内面赤・黒こぼし形へラケズリ 内面 の表面に凹凸あり
21	20	一括	一号住	皿	11期	50%	(12.3)	2.5	(5.2)	良	赤色粒子 白・黒砂粒	褐色	—	—
21	21	280292 一括	一号住	皿	10期	破片	15.0	(2.7)	6.8	良	白・黒色 粒子	褐色	—	外表面体部回転ヘラケズリ 内面み み部・体部に溝状の暗文あり
21	22	408410 429430 カマ ド	一号住	ロクロ ガマ	—	60%	15.0	(11.9)	—	やや 粗	赤色粒子 白色砂粒	赤褐色	—	回転ロクロガマ 内面回転ナデ 信州系?
21	23	287399 404418 419421 446 ~ 449453 カマド 一括	一号住	カメ	—	口縫周 辺のみ	27.8	(8.9)	—	良	白色砂粒 黒・金色 雲母	明赤 褐色	薄口 縁型	—
21	24	387	一号住	カメ	10期~ 11期	口縫部 破片	— (3.2)	—	—	良	赤色粒子 金色雲母	褐色	—	口縫部外表面体部横ナデ 内面体 部横ナデハケメ
21	25	436457 461	一号住	カメ	9期~ 10期	口縫部 破片	(29.4)	(7.0)	—	良	赤色粒子 白色砂粒 金色雲母	明赤 褐色	薄口 縁型	—
21	26	一括	一号住	カメ	10期	口縫部 破片	— (3.9)	—	—	良	赤色粒子 白色砂粒 金色雲母	明赤 褐色	薄口 縁型	— 外面斜位ハケメ 内面体部横位 ハケメ

土器類表

桜田 番号	遺物 番号	庄記 番号	出土 地点	器形	時期	残存率	寸法(cm)(現存値)			焼成	胎土	色調	口縁 断面形	底盤 の比	調整技法
							口径	器高	底径						
21	27	403 404	一号住	カヌ	10期	口縁部 破片	(30.0)	(6.3)	—	良	赤色粒子 白・黑色砂粒 金色雲母	に赤い 青褐色	薄口 縦型	—	外面部斜位ヘラケズリ
21	28	285 405 406 416	一号住	カヌ	10期	底部周 辺破片	—	(11.2)	9.0	良	赤色粒子 白・黑色砂粒 金色雲母	明褐色	薄口 縦型	—	外面部体部斜位ハケメ 内面部 横ナデ ヘラケズリによる整形 底部斜位
21	29	426	一号住	カヌ	10期	口縁部 破片	(27.0)	(5.9)	—	良	赤色粒子 白・黑色砂粒 金色雲母	明褐色	薄口 縦型	—	外面部斜位ヘラケズリ
21	30	413425 428 454 ~ 456	一号住	カヌ	10期	脚部破片	—	(13.0)	—	良	赤色粒子 白・黑色砂粒 金色雲母	に赤い 青褐色	—	—	外面部体部斜位ハケメ 内面部 横ナデ
22	31	床一括	一号住	S字 ガム	古墳	口縁部 破片	—	(2.6)	—	やや 良	赤色粒子 白色砂粒 金色雲母	に赤い 青褐色	複合	—	外面部部付近斜位ハケメ 内 面部ナデ
22	32	171	一号住	羽茎?	12期~ 13期	破片	—	3.5	—	良	黒色砂粒 金色雲母	黒褐色	—	—	外面部横ナデ 内面部部ヘラケ ズリ
22	33	109	一号住	須恵器	—	口縁部 破片	—	—	—	良	白色粒子	明褐色 黄色	—	—	—
22	34	110	一号住	須恵器 カヌ	—	脚部破片	—	—	—	良	—	灰色	—	—	外面部タキ
22	35	385	一号住	須恵器 カヌ	—	脚部破片	—	—	—	良	—	黒褐色	—	—	外面部タキ
22	36	172	一号住	須恵器 カヌ	—	脚部破片	—	(4.4)	—	やや 良	白色粒子	灰褐色	—	—	外面部部内面部ともタキ
22	1	一括	二号住	坏	8期~ 9期	20.0	(10.6)	4.4	(5.6)	良	紫色粒子 黒色砂粒	褐色	丸形	53%	外面部底下降半斜位手持ちはヘケ ズリ 内面部有文あり
22	2	一括	二号住	カヌ	9期	口縁部 破片	(36.0)	(5.7)	—	良	赤色粒子	褐色	縦型	—	外面部斜位ハケメ 内面部横位ハケ ズリ
22	3	一括	二号住	坏	8期~ 9期	破片	(12.8)	(3.4)	—	良	赤色粒子 黑色砂粒	明褐色	丸形	—	外面部手持ちヘラケズリ 内面部 底に有文あり
22	4	一括	二号住	カヌ	9期	口縁部 破片	(25.4)	(3.1)	—	良	赤色粒子 黑色砂粒 金色雲母	褐色	薄口 縦型	—	外面部斜位ハケメ 内面部横位ハケ ズリ
22	5	一括	二号住	カヌ	—	底盤破片	5.9	(7.0)	—	やや 良	赤色粒子 黑色砂粒 金色雲母	暗褐色	—	—	—
22	6	391	二号住	カヌ	9期	口縁部 破片	—	(2.1)	—	やや 粗	赤色粒子 白・黑色砂粒 金色雲母	褐色	薄口 縦型	—	—
22	7	一括	二号住	カヌ	同一個 体?	脚部破片	—	(5.7)	—	良	赤色粒子	褐色	—	—	外面部横位ハケメ 内面部横位斜位 ハケメ
22	8	390 カヌ?	二号住	カヌ	9期	口縁部 破片	—	(2.3)	—	やや 良	赤色粒子 黑色砂粒 金色雲母	褐色	薄口 縦型	—	—
22	9	一括	二号住	カヌ	—	脚部破片	—	(10.4)	—	良	赤色粒子 白色砂粒 金色雲母	褐色	—	—	外面部横位ハケメ 内面部横位斜位 ハケメ
23	10	一括	二号住	須恵器 カヌ	—	底部破片	—	(12.7)	10.0	良	白色砂粒	灰色	—	—	外面部底部タタキ 内面わず かにヘラケズリの跡
23	11	一括	二号住	高台 付坏	古墳	脚部破片	—	(4.1)	—	良	赤色粒子	褐色	—	—	外面部全表面ミガキ 内面しぶ り込み?
23	12	一括	二号住	壇	古墳	底盤破片	—	7.0?	—	やや 良	赤色粒子 白色砂粒	褐灰色	—	—	外面部タキの跡? 内面ヘラケ ズリのあとわずかに残る
23	13	一括	二号住	内耳	中世	口縁部 破片	—	(17.6)	—	良	赤色粒子 黑色砂粒 金色雲母	褐色	—	—	—
23	1	356 373 375	一号 土坑	カヌ	—	底盤破片	—	(2.7)	(10.0)	良	赤色粒子 白色砂粒 金色雲母	に赤い 青褐色	丸形	—	内面部底邊巻状文あり 底盤 と底部周辺回転ヘラケズリ
23	2	335 364	一号 土坑	カヌ	—	底盤破片	—	—	—	良	赤色粒子 白・黒色 砂粒雲母	褐色	—	—	外面部体部横位ハケメ 後はヘケズリ 内面部横位ハケメ 底部ユビナデ

土器觀察表

神社番号	遺物番号	登記番号	出土地点	器形	時期	残存率	法徳(cm)(現存値)		焼成	胎土	色調	口縁部形	底面・口縁の状況	調整技法
							口径	裏高						
23	1	354	土器窯 中区	环	10期	破片	(15.8)	(4.5)	—	良	赤色粒子	橙色	五線?	—
23	2	199	土器窯 中区	环	—	破片	—	(2.7)	(4.4)	やや良	白・赤・黒色 粒子雲母	橙色	—	—
23	3	191	土器窯 中区	内黒 环	9期	20%	(14.6)	5.2	(4.8)	良	赤・黒色 粒子雲母	明赤 褐色	丸形	33%
23	4	87	土器窯 中区	环	—	10%	—	(3.2)	4.0	良	赤・黒色 粒子雲母	赤褐色	—	—
23	5	253 258 325	土器窯 中区	环	10期	90%	12.7	4.1	3.8	やや良	赤色粒子 白・赤色砂粒	褐色	五線	30%
24	6	270	土器窯 中区	环	9期	70%	11.3	4.4	4.3	やや良	赤色粒子 白色砂粒	橙色	丸形	38%
24	7	242	土器窯 中区	环	11期?	30%	(11.4)	3.8	4.4	良	赤・黒色 粒子	明赤 褐色	丸形	39%
24	8	71	土器窯 中区	环	9期	30%	(12.2)	4.1	(3.8)	良	赤・黒色 粒子雲母	褐色	五線	31%
24	9	22	土器窯 中区	环	10期?	20%	—	(2.7)	6.4	やや良	赤・黒色 粒子	褐色	—	—
24	10	993	土器窯 中区	内黒 环	—	破片	—	(0.8)	(4.2)	良	赤・黒色 粒子	赤褐色	—	—
24	11	321	土器窯 中区	环	13期?	破片	—	(1.7)	(5.8)	良	赤・黒色 粒子	赤褐色	—	—
24	12	46	土器窯 中区	皿	9期	50%	(11.8)	2.5	—	良	白・赤色 粒子砂粒	褐色	丸形	—
24	13	185	土器窯 中区	皿	11期?	破片	(10.4)	1.8	(4.6)	やや良	赤・黒色 粒子雲母	明黄 褐色	丸形	—
24	15	317 318	土器窯 中区	环	中世	—	(13.8)	(3.2)	—	良	赤色粒子 金色雲母	明褐色	—	—
24	16	308 309 (陶)	土器窯 中区	环(陶)	中世	破片	(12.8)	(4.2)	—	良	赤色粒子 金色雲母	褐色	—	—
24	17	90	土器窯 中区	皿	9期	30%	(15.2)	2.0	(8.2)	良	赤・黒色 粒子	赤褐色	丸形	—
24	18	一括のみ	土器窯 中区	高台 付环	11世纪 前後	破片	(11.2)	(2.1)	6.2	良	—	—	—	56%
24	19	295	土器窯 中区	高台 付环	—	破片	—	(1.9)	—	良	白・黒色 粒子	灰白色	—	—
24	20	300 303	土器窯 中区	环(陶)	中世	破片	—	(3.5)	5.4	良	赤色粒子 金色雲母	褐色	—	—
24	21	219	土器窯 中区	高台 付环	—	破片	—	(3.1)	7.2	良	白・黒色 粒子	灰白色	—	—
24	22	68 238 241 255 256	土器窯 中区	カメ	9期~ 10期	口縁部~ 肩部上部 3分の1	(29.2)	(20.0)	—	良	白・黒色粒子 金色雲母	褐色	—	—
25	23	61 209 222	土器窯 中区	カメ	9期~ 10期	口縁部の 二分の一	(28.0)	(7.9)	—	良	赤色粒子 白色砂粒	赤褐色	—	—
25	24	75	土器窯 中区	カメ	9期~ 10期	破片	(31.0)	(6.0)	—	良	赤色粒子 白色砂粒	褐色	—	—
25	25	245	土器窯 中区	カメ	9期~ 10期	破片	(31.4)	6.0	—	良	赤色粒子 白色砂粒	赤褐色	—	—
25	26	244	土器窯 中区	カメ	9期~ 10期	破片	(30.0)	(5.2)	—	良	赤色粒子 白色砂粒	赤褐色	—	—
25	27	355	土器窯 中区	カメ	9期	破片	—	3.1	—	良	白・赤・ 黒色粒子 金色雲母	明赤 褐色	口縁部折 り返し	—
25	28	80	土器窯 中区	カメ	—	破片	—	(2.5)	—	良	赤色粒子 白色砂粒	褐色	口縁部折 り返し	—
25	29	310	土器窯 中区	カメ	—	破片	—	(6.2)	—	良	赤色粒子 白色砂粒	褐色	厚口 縁部	—
25	30	251	土器窯 中区	カメ	—	破片	—	(3.9)	—	良	赤色粒子 黑色 金色 雲母	褐色	口縁部折 り返し	—
25	31	59 70 73 85	土器窯 中区	カメ	9期	底部破片	—	9.0	—	良	赤色粒子 白・黒色 砂粒雲母	明褐色	—	—
25	32	58	土器窯 中区	カメ	—	底部二 分の一	—	(3.2)	10.0	良	赤色粒子 白色砂粒	灰褐色	—	—
26	33	49 51 62 205 207 210 224 33	土器窯 中区	カメ	—	脚部破片	—	(15.9)	—	良	赤色粒子 白・黒色 砂粒雲母	褐色	—	—
26	34	202	土器窯 中区	カメ	—	底部破片	—	(4.1)	(8.2)	良	赤色粒子 白・黒色 砂粒雲母	明赤 褐色	—	—

土器觀察表

標因 番号	遺物 番号	注記 番号	出土 地點	器形	時期	残存率	法量(cm)(現存値)			焼成	胎土	色調	口縁 部形	縦・横 比	調整技法
							口径	基高	底径						
26	35	74	土器集 中区	カヌ	—	底部破片	—	(4.1)	(8.0)	良	赤色粒子 白・黒色 砂粒蓋母	明褐色	—	—	外腹わずかに縫ハケメ 内面横 ハケメ 底部木葉痕
26	36	223	土器集 中区	ロクロ ガメ	—	底部のみ	—	(2.3)	7.8	良	赤色粒子 白・黒色砂粒	明赤 褐色	—	—	外面内面体部ロクロナデ底部回 転糸切り縫
26	37	179 189	土器集 中区	S字 ガメ	古墳	—	—	(5.2)	—	良	赤色粒子 白・黒色砂粒 金色雲母	に赤い 黄褐色	—	—	外面系斜位ハケメ 内面ユビナ ダ
26	38	196	土器集 中区	柱状 高台杯	12期	底部のみ	—	(4.7)	7.8	良	赤色粒子 白・黒色砂粒	赤褐色	—	—	外面内面体部ともロクロナデ 底部回転糸切り縫
26	39	316	土器集 中区	土器 カヌ	10期	底部破片	—	(7.8)	(16.0)	良	白色砂粒	灰色	—	—	外面体部タタキ
26	40	257 259	土器集 中区	カヌ	—	破片	—	(6.8)	—	良	白色砂粒	灰色	—	—	外面に灰釉
26	41	168	土器集 中区	脚足 (火附)	—	破片	—	(5.6)	—	やや 粗	白・黒色 砂粒	に赤い 灰褐色	—	—	
26	42	351	土器集 中区	置き カヌ	—	破片	—	(4.1)	(16.0)	やや 良	赤色粒子 白色粒子 金色雲母	に赤い 灰褐色	—	—	外面体部ハケメ 内部体部ハケ メ ユビナデ底部折り返し

磁器觀察表 (江戸時代)

桝 番号	造物 番号	注記 番号	出土 地點	器種		形状	種別	法量(cm)(奥存値) 口径 磁器 底径			繪付け・釉薬	備考
				高	幅			口径	高	底径		
27	1	106-148	2号溝	碗	小	丸形	磁器	(5.4)	4.7	3.2	染付	菊
27	2	118	2号溝	碗	中	丸形	磁器	(10.2)	(4.0)	—	染付	菊 etc
27	3	—	2号溝	碗	小	丸形	磁器	(8.0)	(4.4)	—	染付	菊 内面に燒繩の汚れ
27	4	—	2号溝	碗	小	端反形	磁器	(8.8)	4.4	(3.6)	染付	笠
27	5	—	2号溝	碗	中	丸形	磁器	(10.9)	5.9	(4.5)	染付	
27	6	7	2号溝	碗	小	筒形	磁器	(7.0)	(4.1)	—	染付	菊花散らし
27	7	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	2.1	—	染付	燒繩草 燒繩
27	8	—	2号溝	碗	小	端反形	磁器	—	(3.5)	—	染付	
27	17	37	2号溝	碗	小	丸形	磁器	7.0	(2.3)	—	染付	船 一重網目文様
27	9	—	2号溝	碗	小	—	磁器	—	(3.8)	—	染付	雪輪梅樹文 ?
27	10	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(3.8)	—	染付	
27	11	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(3.2)	—	染付	雪輪梅樹文 ?
27	12	5	2号溝	碗	小	丸形	磁器	—	(3.8)	—	なし	内面に燒繩の液たれの跡
27	13	22	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(2.6)	—	染付	
27	14	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(2.8)	—	染付	菊花文
27	15	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(2.1)	—	染付	花
27	16	3	2号溝	碗	中	丸形	磁器	(10.6)	(4.2)	—	染付	
27	17	37	2号溝	碗	小	丸形	磁器	7.0	(2.3)	—	染付	船 一重網目文様
27	18	114	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(3.5)	(4.0)	染付	花 賀? 烧繩
27	19	31	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(3.6)	(4.4)	染付	木?
27	20	—	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(2.7)	(6.0)	染付	菊?
27	21	13	2号溝	碗	小	丸形	磁器	—	4.4	—	染付	笠
27	22	32	2号溝	碗	小	丸形	磁器	—	(3.4)	—	染付	
27	23	—	2号溝	碗	中	—	磁器	—	—	(4.0)	染付	
28	24	—	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(3.0)	(4.0)	染付	炳唐草 見込額 底部文字か記号 烧繩
28	25	11	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(2.8)	(4.0)	染付	雲? 見込
28	26	115	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(2.7)	(4.5)	染付	
28	27	—	2号溝	碗	中	—	磁器	—	(1.8)	(3.0)	染付	菊 寓入
28	28	—	2号溝	碗	中	—	磁器	—	(3.0)	(4.0)	染付	笠 花 烧繩 底部に記号
28	29	—	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(4.3)	(4.0)	染付	
28	30	—	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(1.3)	(5.5)	染付	見込 五弁花?
28	31	—	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(2.6)	(4.4)	染付	
28	32	—	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(3.8)	4.2	染付	見込鶴?
28	33	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(1.7)	—	染付	
29	34	29	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(3.5)	(3.6)	染付	菊? 見込寿 烧繩
29	35	121	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(2.8)	(4.4)	染付	見込 寿

磁器觀察表（江戸時代）

博物 番号	遺物 番号	注記 番号	出土 地点	器種		形状	種別	法量(cm)(現存値)			給付け・釉薬	備考
				口径	體形			底径				
29	36	—	2号溝	瓶	中	一	磁器	—	(2.2)	—	染付	
29	37	—	2号溝	瓶	中	丸形	磁器	—	(2.9)	(3.0)	染付	
29	38	34	2号溝	瓶	小	—	磁器	—	—	—	染付	雪輪模様文
29	39	124	2号溝	瓶	中	丸形	磁器	—	(2.4)	(3.8)	染付	焼締
29	40	147	2号溝	瓶	小	端反形	磁器	—	(3.4)	—	染付	
29	41	14	2号溝	瓶	小	端反形	磁器	—	(4.2)	—	染付	
29	42	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(2.6)	—	染付	垂
29	43	—	2号溝	瓶	中	—	磁器	—	(1.9)	—	染付	菊 貫入
29	44	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	—	—	染付	
29	45	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(3.3)	—	染付	
29	46	—	2号溝	—	—	—	磁器	—	(2.4)	—	染付	
29	47	—	2号溝	皿	小	—	磁器	—	(2.1)	(7.2)	染付	
29	48	36	2号溝	皿	小	—	磁器	(9.5)	2.3	(4.6)	染付	植物
29	49	18	2号溝	皿	小	—	磁器	(6.8)	2.2	1.4	染付	鳥(ひな)
29	50	—	2号溝	皿	中	—	磁器	(14.0)	(2.3)	—	染付	
29	51	138	2号溝	皿	小	—	磁器	—	(1.7)	(6.2)	染付	
30	52	113	2号溝	皿	中	—	磁器	(15.0)	3.4	(8.0)	染付	雲
30	53	10	2号溝	皿	中	—	磁器	—	(2.3)	(8.5)	染付	見込鳳凰 底部に文字あり 焼締
30	54	—	2号溝	皿	中	—	磁器	—	(1.7)	—	染付	
30	55	19	2号溝	皿	中	—	磁器	—	(1.4)	—	染付	
30	56	—	2号溝	皿	中	—	磁器	—	(4.0)	(7.2)	染付	雲
30	57	—	2号溝	鉢	—	—	磁器	—	(3.3)	(9.2)	外面上に釉	
30	58	—	2号溝	鉢	—	—	磁器	—	(2.3)	(6.4)	外面上に釉	
30	59	2	2号溝	皿	中	—	磁器	—	(1.3)	—	染付	底部に焼締の記号 焼締
30	60	25	2号溝	段重	—	—	磁器	(14.8)	5.1	(16.8)	染付	納唐草 焼締
30	61	—	2号溝	鉢	—	—	磁器	—	(3.9)	—	染付	
30	62	—	2号溝	段重	—	—	磁器	(13.2)	(4.4)	—	染付	納唐草
30	63	7	2号溝	段重	—	—	磁器	—	(0.8)	—	染付	
31	64	—	2号溝	諦利	—	—	磁器	—	(2.4)	(3.6)	染付	
31	65	183	2号溝	諦利	—	—	磁器	—	(2.5)	(5.6)	外面上に釉	底部に重ね焼きの跡
31	66	—	2号溝	瓶	—	—	磁器	—	(3.0)	—	染付	釉
31	67	29	2号溝	土瓶	—	—	磁器	—	(3.0)	—	染付	

磁器觀察表（明治時代）

辨認 番号	遺物 番号	注記 番号	出土地点	器種		形状	種別	法量(cm)(現存値)			繪付け 抽象	備考
				口径	器形			底径				
31	1	—	2号溝	碗	小	丸形	磁器	(7.0)	4.0	(3.6)	染付	風景
31	2	—	2号溝	碗	小	端反形	磁器	(7.0)	3.9	(3.0)	解板転写	扇子 道
31	3	—	2号溝	碗	小	丸形	磁器	(8.8)	4.4	(2.8)	解板転写	菊
31	4	—	2号溝	碗	中	端反形	磁器	(11.2)	5.8	(3.8)	染付	植物(葉)
31	5	—	2号溝	碗	小	端反形	磁器	(9.8)	(5.0)	—	染付	五弁花
31	6	144	2号溝	碗	中	丸形	磁器	(11.2)	(4.1)	—	—	松葉 花
31	7	—	2号溝	碗	小	—	磁器	—	(3.1)	(4.2)	染付	
31	8	—	2号溝	碗	小	—	磁器	—	(3.4)	(4.0)	染付	
31	9	16	2号溝	碗	中	丸形	磁器	—	(5.0)	(3.8)	型紙摺り	見込菊 他
31	10	—	2号溝	碗	中	—	磁器	—	(3.5)	(3.6)	型紙摺り	
31	11	—	2号溝	碗	中	—	磁器	—	(3.0)	(3.8)	型紙摺り	
31	12	—	2号溝	碗	中	—	磁器	—	(3.0)	(3.6)	型紙摺り	
31	13	139	2号溝	碗	—	—	磁器	—	(2.1)	(3.0)	色絵	狂 見込に文字?
31	14	—	2号溝	碗	—	—	磁器	—	(2.7)	—	型紙摺り	菊 五弁花 波
31	15	—	2号溝	碗	—	—	磁器	—	(1.8)	—	型紙摺り	
32	16	—	2号溝	碗	—	—	磁器	—	(3.1)	—	染付	唐草
32	17	—	2号溝	碗	—	—	磁器	—	(3.8)	—	解板転写	
32	18	—	2号溝	碗	—	—	磁器	—	(2.5)	—	型紙摺り	
32	19	—	2号溝	碗	—	—	磁器	—	(2.7)	—	型紙摺り	
32	20	—	2号溝	酒杯	—	—	磁器	—	(0.9)	2.4	—	
32	21	—	2号溝	酒杯	—	—	磁器	—	(0.8)	2.2	—	
32	22	5	2号溝	酒杯	—	—	磁器	—	(2.2)	—	—	
32	23	—	2号溝	碗の蓋	—	—	磁器	—	(1.3)	—	染付	
32	24	—	2号溝	徳利	—	—	磁器	—	(9.1)	(5.4)	解板転写	

陶器・瓦観察表（江戸時代）

探査番号	遺物番号	注記番号	出土地点	器種	形状	種別	法量(cm)(現存値)			絵付け	釉薬	備考
							口径	器高	底径			
32	1	—	2号溝	急須	—	陶器	(6.8)	(0.9)	—			
32	2	—	2号溝	急須	—	陶器	(11.0)	(3.2)	—			
32	3	24	2号溝	急須の蓋	—	陶器	(8.4)	(6.4)	—	京 しからき		
32	4	23	2号溝	蓋	—	陶器	5.6	(2.5)	—			
32	5	—	2号溝	碗・小	—	陶器	9.4	(5.0)	—	染付		全体に胎
32	6	127	2号溝	すり鉢	—	陶器	(31.2)	(6.8)	—			
32	7	100	2号溝	瓦	—	—	長7.9	厚7.7	厚1.9			

22

古錢・キセル観察表

探査番号	遺物番号	注記番号	出土地点	器種	形状	種別	法量(cm)(現存値)			備考
							口径・長さ	器高・幅	底径・厚さ	
32	1	—	寺部3・東部一括	古錢	—	—	2.5	2.5	0.15	淳化元寶
32	2	—	寺部3・東部一括	古錢	—	—	2.5	2.5	0.15	皇宋通寶
32	3	—	寺部3・東部一括	古錢	—	—	2.5	2.5	2.5	開元通寶
32	4	—	寺部3・東部一括	古錢	—	—	2.5	2.5	2.5	寛永通寶
32	5	—	寺部3・東部一括	キセル	—	—	1.9	—	—	

住居・溝・土坑・井戸・水溜観察表

探査番号	調査区	遺構名	位置(グリッド)	平面形状	断面形状	規模(cm)			備考
						長軸	短軸	深さ	
4	寺部1区	1溝	120・129・193	—	箱型	900	150	10	
4	寺部1区	2溝	121・129・194	—	箱型	753	80	8	
4	寺部1区	3溝	130・139	—	箱型	295	110	22	
4	寺部1区	4溝	130	—	箱形	300	23	11	
4	寺部1区	5溝	139・148	—	U字型	510	27	16	
5	寺部1区	6溝	149・158	—	箱型	830	30	12	
5	寺部1区	7溝	140・141	—	箱形	1200	76	30	
5	寺部1区	8溝	149	—	箱形	640	40	28	
4	寺部1区	1土坑	129	楕円形	箱形	80	45	30	
4	寺部1区	2土坑	129	円形	箱型	64	53	16	
4	寺部1区	3土坑	—	円形	箱型	64	60	21	
4	寺部1区	4土坑	139	円形	箱形	72	70	32	
5	寺部1区	5土坑	132	不整円形	U字型	138	40	50	
5	寺部1区	6土坑	132	円形	U字型	62	50	64	
5	寺部1区	7土坑	140	不整円形	箱形	266	110	46	
5	寺部1区	8土坑	141	円形	U字型	68	56	64	
5	寺部1区	9土坑	141	楕円形	U字型	50	28	38	
5	寺部1区	10土坑	149	楕円形	箱型	71	50	30	
5	寺部1区	11土坑	150	楕円形	U字型	126	151	66	
5	寺部1区	12土坑	150	楕円形	箱形	86	50	22	
5	寺部1区	13土坑	149	楕円形	箱型	72	54	26	
6	寺部1区	水溜1	158	—	箱形	95	76	17	
5	寺部1区	水溜2	—	円形	箱形	22	20	74	
6	寺部1区	水溜3	148	楕円形	箱型	165	87	30	
7	寺部2区	1溝	625・636	—	不整形	510	56	17	
7	寺部2区	2溝	626・637	—	箱型	740	57	18	
8	寺部2区	3溝	647	—	不整形	362	90	12	
8	寺部2区	4溝	647・648・658・659	—	不整形	610	112	14	
8	寺部2区	5溝	690・691・701	—	箱形	628	42	12	
8	寺部2区	6溝	702	—	箱形	312	70	10	
8	寺部2区	7溝	702・703	—	箱形	400	68	14	
8	寺部2区	8溝	624・625・635・646	—	箱型	1390	70	10	
8	寺部2区	1土坑	646	方形	不整形	72	58	20	
7	寺部2区	2土坑	658	円形	箱形	350	250	30	
8	寺部2区	3土坑	658	方形	箱型	36	30	10	
10	寺部3区	1号溝	873・878・879・880・881・882・883・884・885・886・887	—	箱形	4250	150	50	
11	寺部3区	2号溝	170・193・194・350・721・722・732・733・885・896・907・918	—	箱型	2600	50	54	
12	寺部3区	1土坑	848	楕円形	箱型	230	105	23	
12	寺部3区	2土坑	848	楕円形	箱型	230	95	25	
12	寺部3区	3土坑	848	楕円形	箱型	95	65	22	
12	寺部3区	4土坑	859	楕円形	不整形	132	67	13	
12	寺部3区	5土坑	847	円形	箱型	62	57	10	
12	寺部3区	6土坑	847	不整形	不整形	100	90	28	
12	寺部3区	7土坑	860・861	不整形	不整形	82	60	10	
12	寺部3区	8土坑	851	不整形	不整形	68	65	10	
12	寺部3区	9土坑	861	不整形	不整形	125	103	7	
12	寺部3区	10土坑	860	方形	箱型	80	67	19	
12	寺部3区	11土坑	860	不整形	箱型	182	65	14	
12	寺部3区	12土坑	872	不整形	箱型	125	117	17	
14	寺部3区	13土坑	859	不整形	箱型	265	220	14	
14	寺部3区	14土坑	870	円形	箱型	110	102	22	
13	寺部3区	15土坑	856・857	不整形	箱型	180	151	26	
13	寺部3区	井戸	926・927	不整形	箱型	146	133	27	
18	寺部4区	1住	1093・1094・1107・1108	正方形	箱形	350	350	400	
18	寺部4区	2住	1096・1097	正方形	箱形	300	300	300	

まとめ

寺部村附第9・中西第3遺跡での今回の発掘調査では、平安時代から近代までの遺物が出土し、平安代時代から近代までの遺構が検出された訳であるが、その中で特記される事項は、発掘区中央部、3・4区の境界線では、標高363.3mを計測する傾斜変換線が認められ、この地形の変化に伴って遺構の立地の変化が認められた事実である。すなわち、この傾斜変換線以下の寺部村附第9・中西第3遺跡では、住居跡の姿は消え若干の土坑基が検出されたのみで、平安から中世に至る遺構は極端に少なくなり、この地点が遺跡内の集落・端部としての認識が可能となったことである。

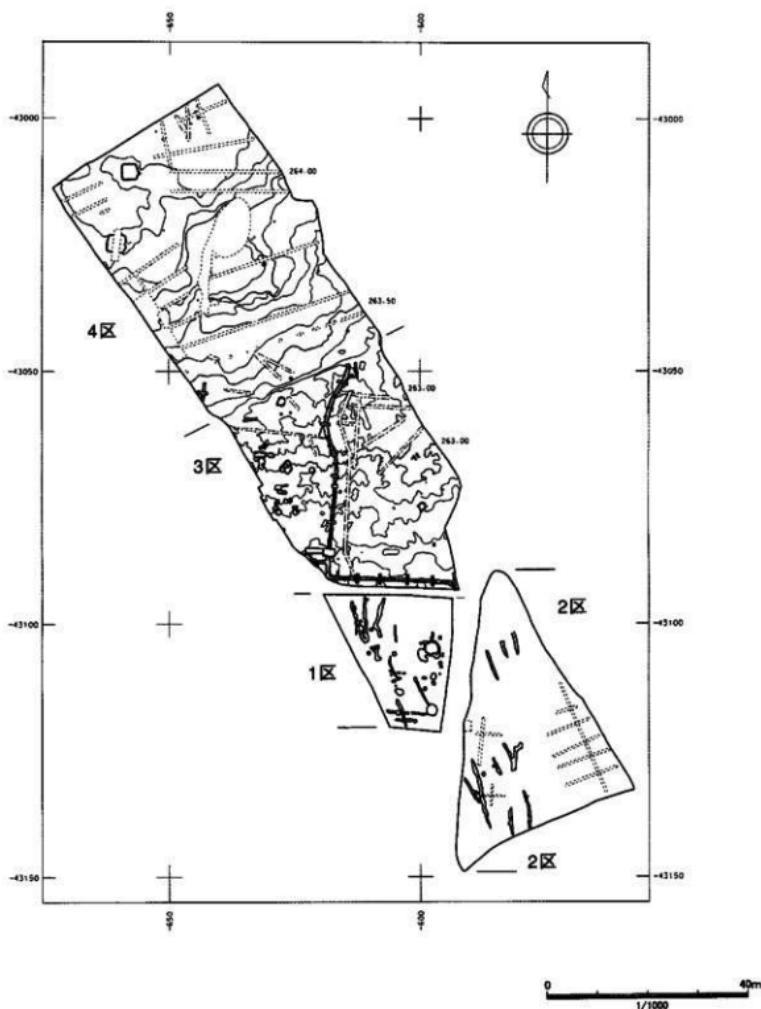
この集落の端部の認識及び確認という成果が得られたということは、周辺集落研究の構造を解明するにあたって、本遺跡の存在は、今後重要な位置を占めてくるものと思われる。以下に、調査区ごとに調査成果を述べ、まとめにとする。

4区の遺構 この傾斜変換線を境に、調査区上位・北部の4区では住居跡2軒が検出され、2軒とも平面形状は正方形、断面形状は箱型であり、規模は3.5mの規模におさまる。1号住居跡は、住居中央および竪上部は土器抗により破壊されていたが、ほぼ全容は捉えられたものと思われる。住居跡床面付近および竪内からは甲斐型土器の層年代（1992・瀬田）、IX-X期の杯類が多量に出土しており、9世紀第4四半期～10世紀第1四半期の年代が想定された。2号住居跡は、河川礫層に構築された例で、やはりIX期が主体を占めてほぼ同年代の築造が与えられる。これらの住居の南方の傾斜変換線上位端部にあたる箇所では、IX-X期を主体にXII期までの焼土を伴う土器集中区が確認された。この土器集中区より南側部の傾斜変換線下位の発掘区では遺物出土量は激減し、摩滅した状態で出土することから、傾斜変換線先端部に位置する土器集中区は居住区の範囲の極限を示す何らかの祭祀行為と考えたい。このことは、後記する下位の発掘区南部の1・2・3区では、上記の遺構に近い年代を示す例では3区の1号土坑出土墓の皿1点（IX期）と他に1例の土坑、計2基が確認されたにとどまり、さらに十数条南北に出された溝は、軟弱な地盤の低湿地に自然水路が流れた痕跡と解釈され、1・2・3区の出土遺物の大部分は3cm大の遊離資料であり、住居関係資料が検出されない空間であったことからもうなづけよう。

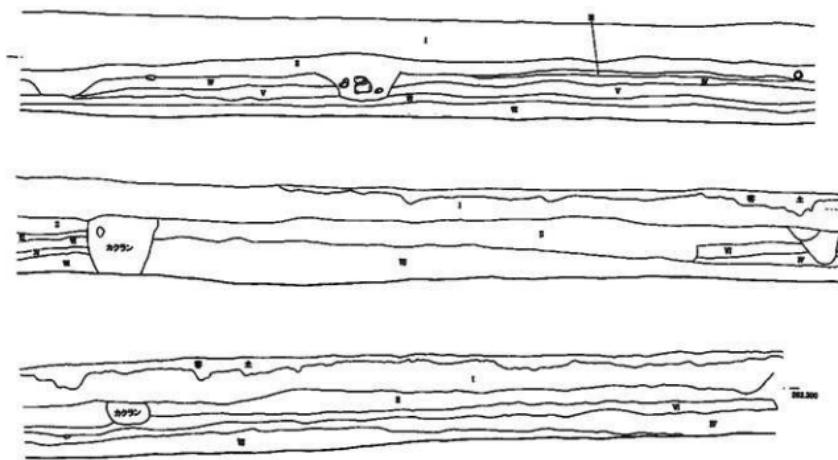
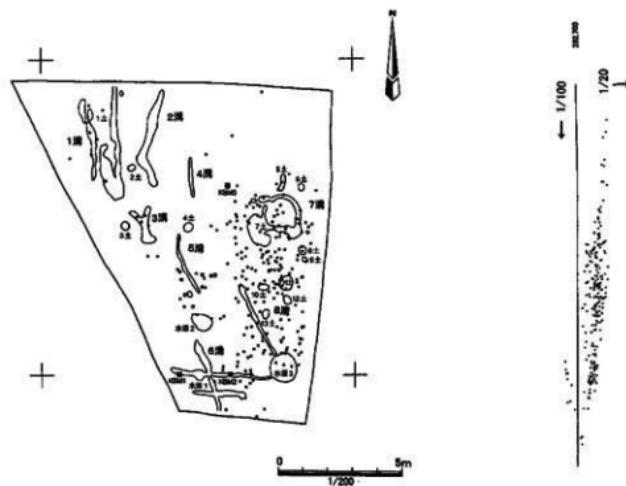
3区の遺構 土坑15基が確認されたが、いずれも3区中央を南北に流れる水路の西部に集中する。1・2号土坑は、形態、および土器出土状態から土坑墓としての性格が与えられる。13号から14号土坑は、土坑内に礫を大量に検出するが用途は不明としかいえない。1号井戸とした石組みを持つ遺構も本来の井戸とは性格が異なり、水溜としての用途が強いものであり、先の、13～15号土坑も同一な用途の可能性が高い。3区中央を流れる用水路（1号溝）は一部湾曲するがほぼ直線的に南北に流れ、3区末端で直角に東西に流れる2号溝と合流する。この水路は3・4区の境辺りから豊富に湧き出る水量を利用した生活用水と考えられる。江戸末期に使用が開始され、東西に流れる2号溝は昭和の30年代に改築されている。

1・2区の遺構は、水性堆積の軟弱な地盤に16条の溝が確認された。それらは不規則で蛇行して検出される状態からは、緩やかな水の流れに軟弱な地盤が侵食されていく自然溝の生成過程として読み取れる。1区では、6・8溝と水溜1・2・3号が遺構として確認される。又3号水溜を除く水溜1・2号水溜と6・8溝は、水路と水溜の関係で機能しているが目的は不明であり、時期は近代瓦片等が1号水溜より検出されることより当該期が想定される。

（小林広和・猪股一弘）



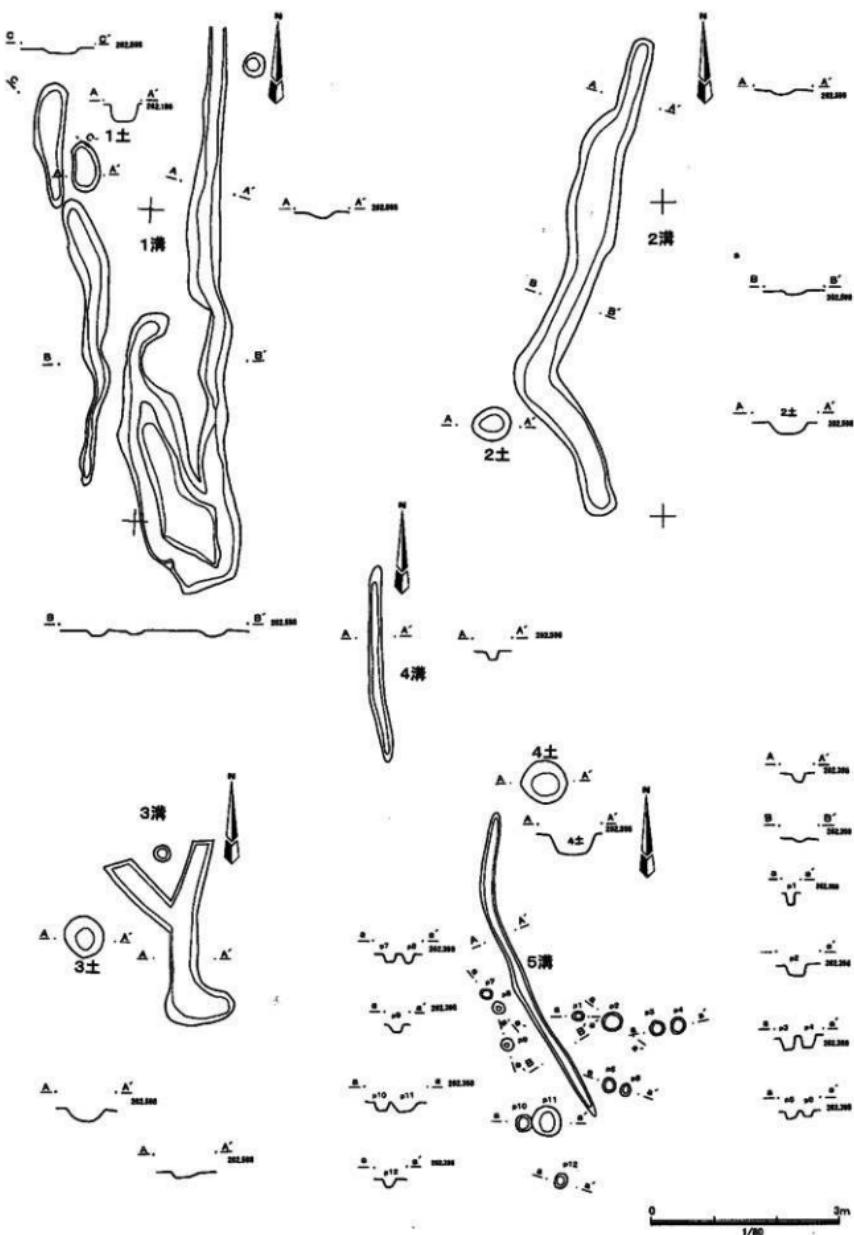
第2図 寺部村附第9・中西第3遺跡全体図



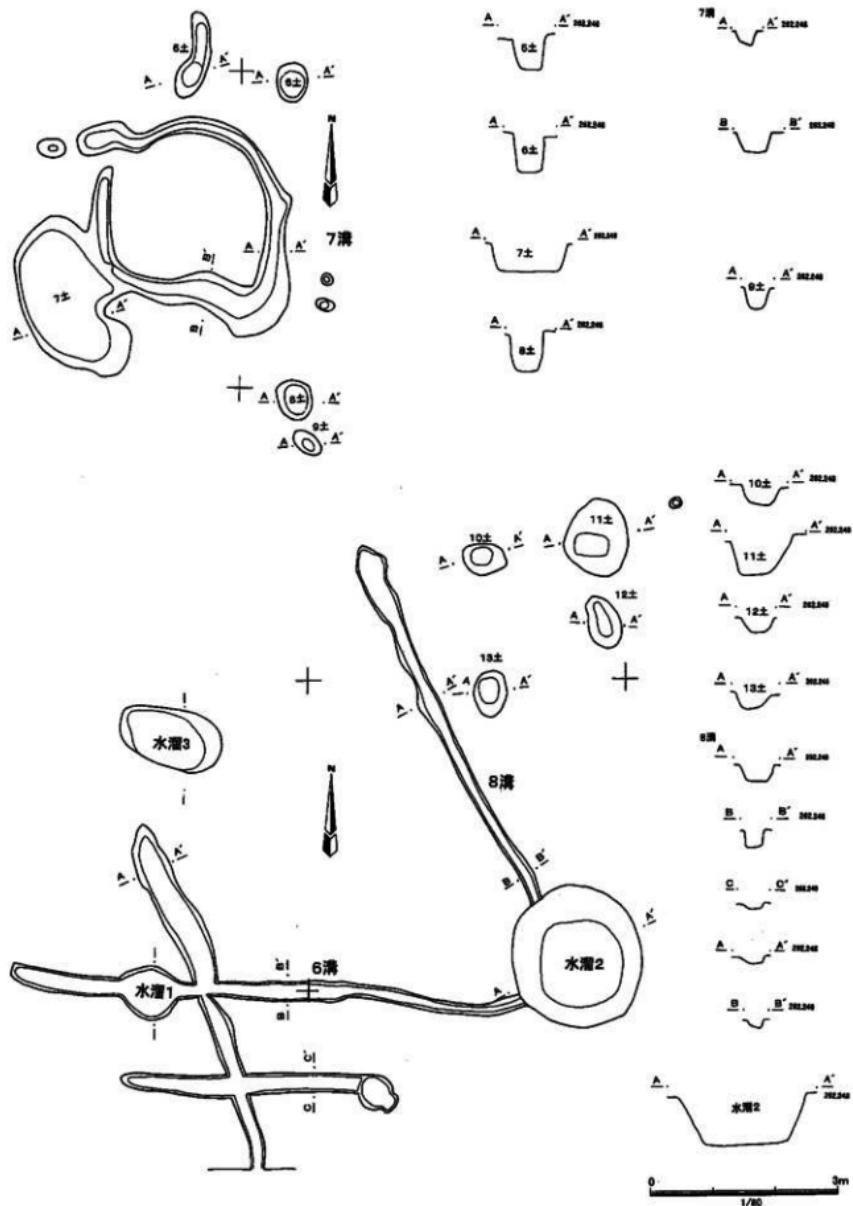
- I. 耕作土
- II. 黄灰褐色、木炭・土器の粒子含む。
- III. 黄灰褐色
- IV. 黄灰褐色 5mm-10mmの砂礫を含む。
- V. 砂層
- VI. 黑褐色 粒密・乾くとしまる。砂を若干含む。
- VII. 砂礫層

0 2m
1/100

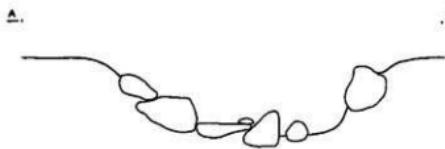
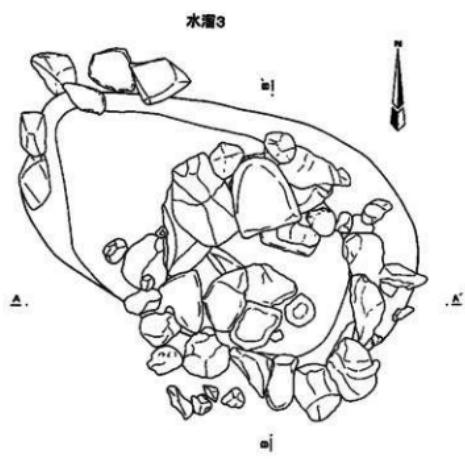
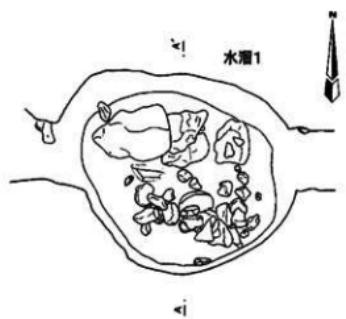
第3図 1区、全体図、遺物平面・垂直分布図、発掘区西壁セクション



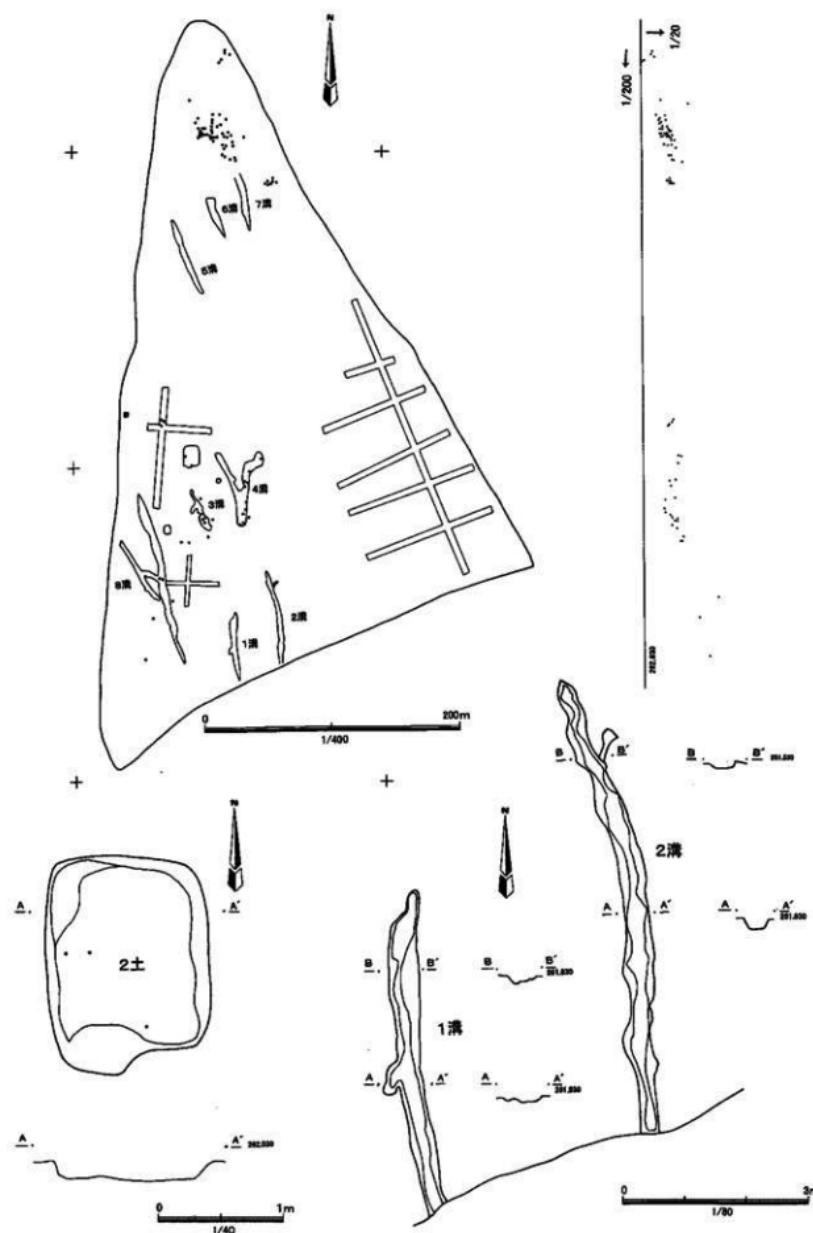
第4図 1区、1～5溝、1～4号土坑実測図



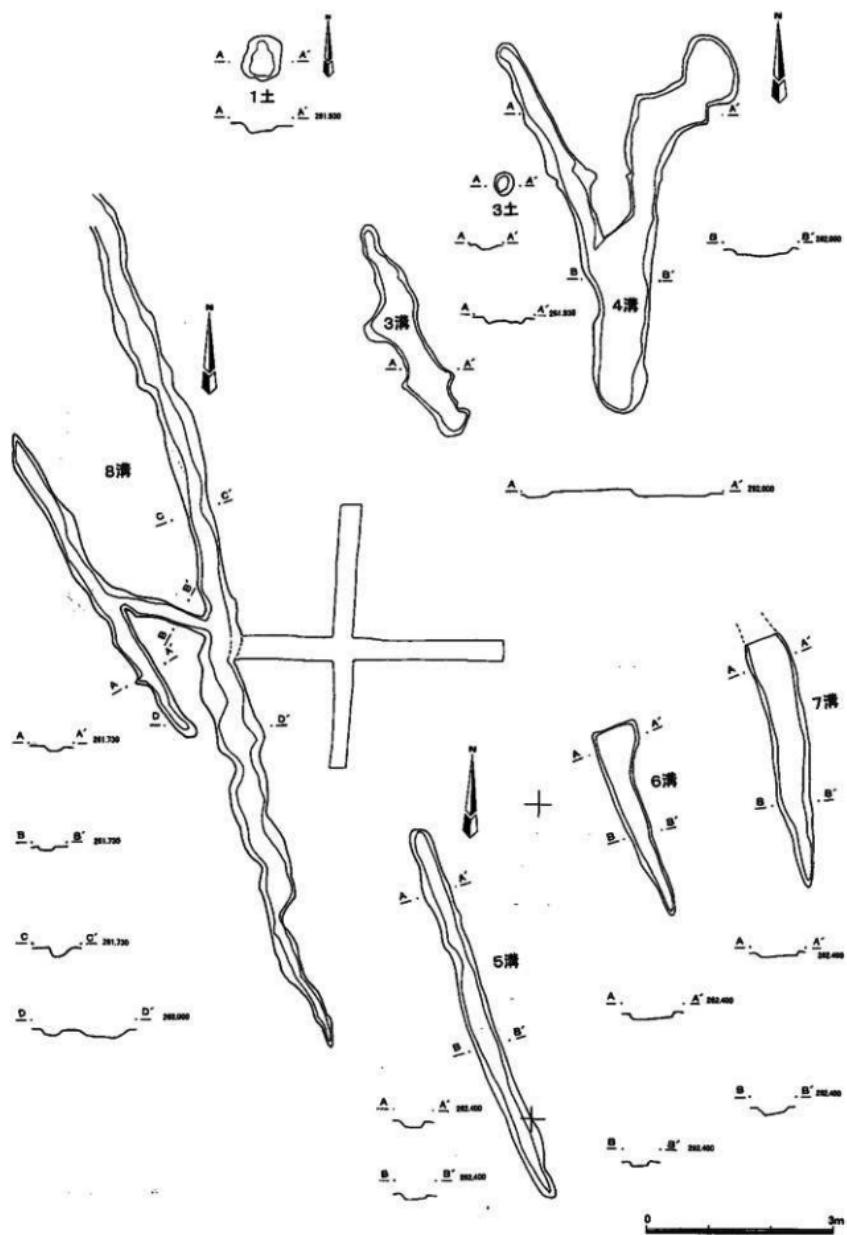
第5図 1区、6～8溝、5～13号土坑、1～3号水槽実測図



第6図 1区、1・3号水溜実測図



第7図 2区、全体図、遺物平面・垂直分布図、1・2溝、2号土坑実測図

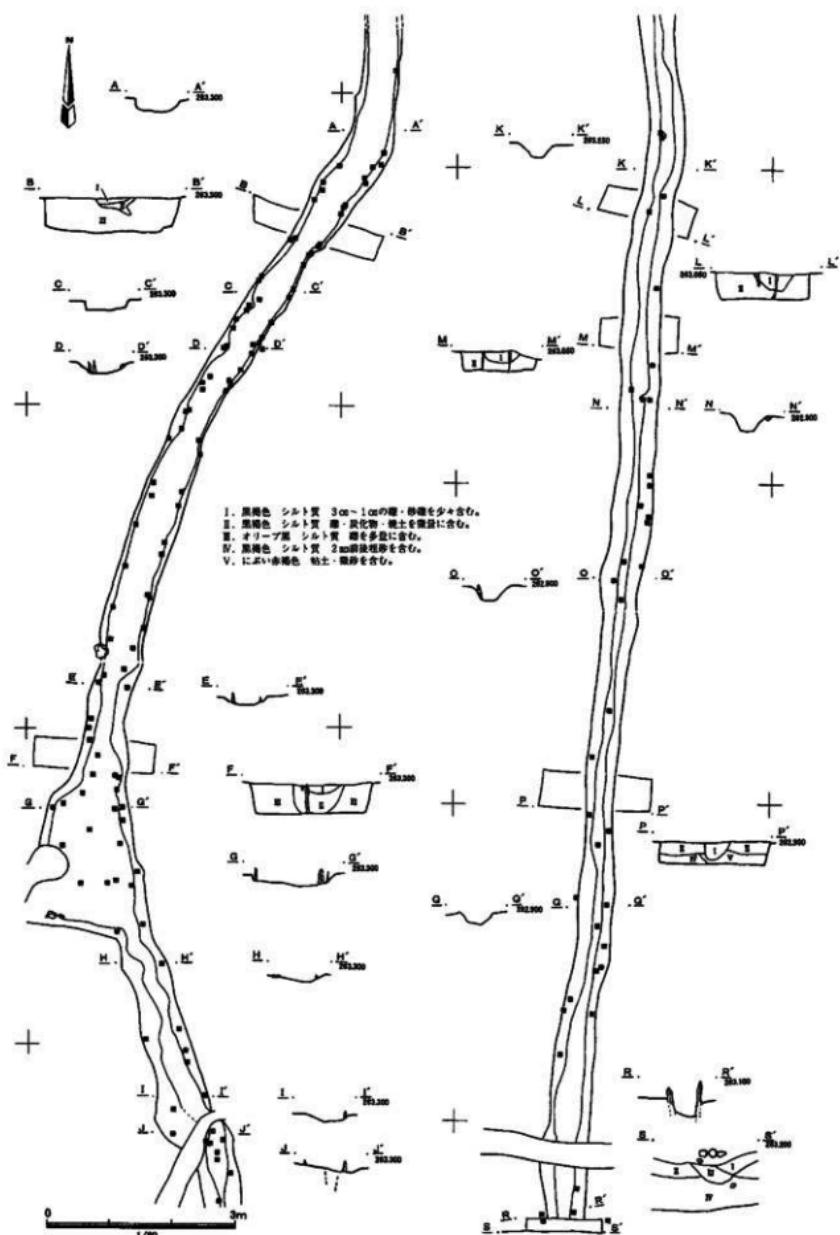


第8図 2区, 1・3号土坑、3~8溝実測図

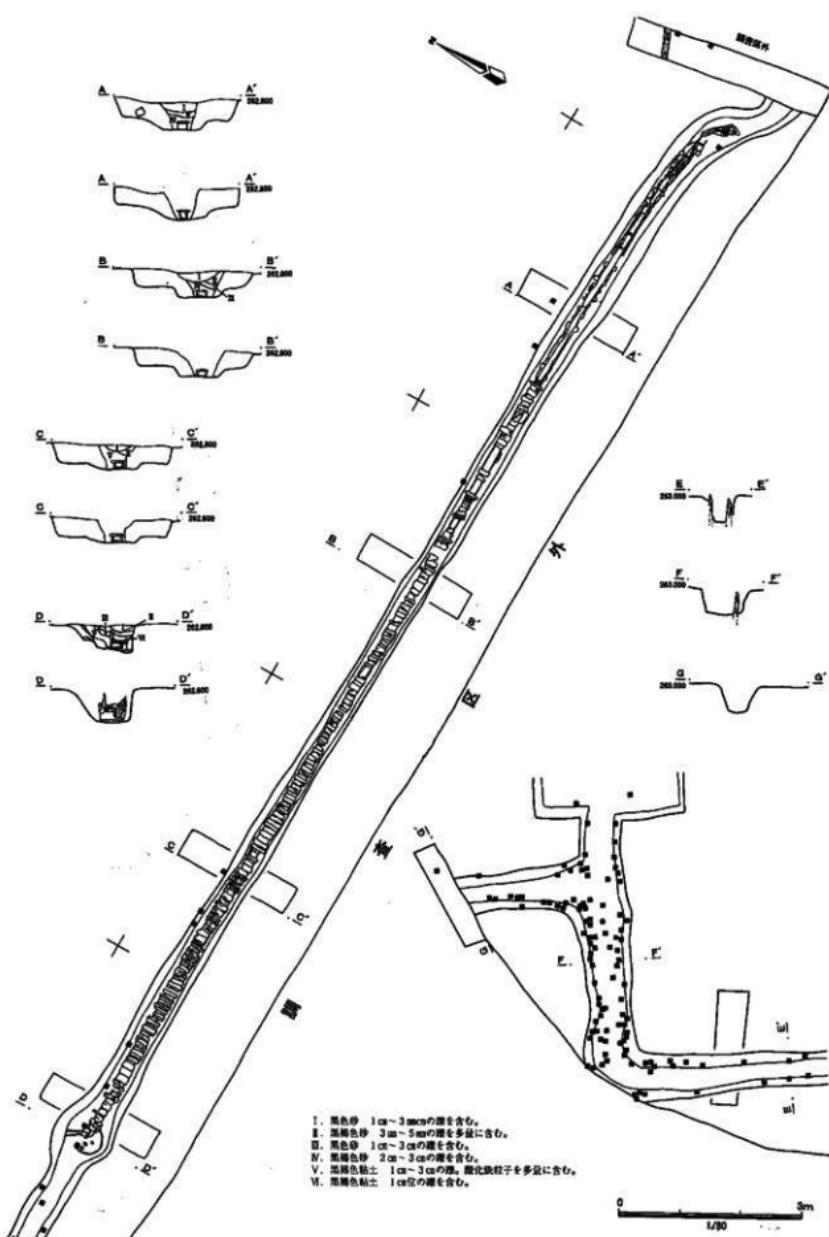


- I. 黒褐色 粒状鉢土・礫を少含む。
- II. 黒褐色 にぶい黄褐色土・粒状の砂土・細かい礫を少含む。
- III. 黑褐色 にぶい黄褐色土を全体に含む。
- IV. 黑褐色 にぶい黄褐色土を含む。
- V. 黑褐色 にぶい黄褐色土・炭化物の性土を少量含む。
- VI. 黑褐色 にぶい黄褐色土・炭化物を微量に含む。
- VII. 黑褐色 にぶい黄褐色土・礫を少含む。
- VIII. 黑褐色 にぶい黄褐色土を少量 磷・小さい土器片を混じる。

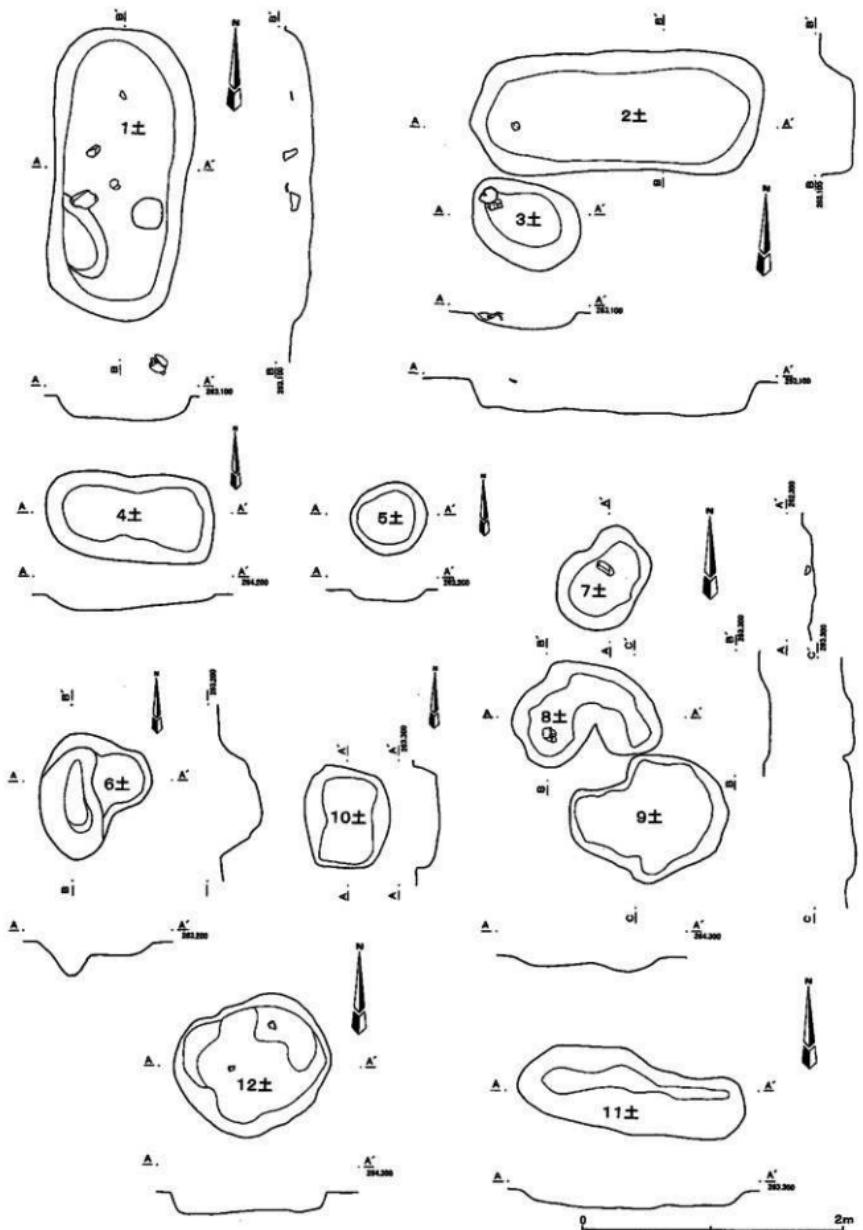
第9図 3区、全体図、遺物平面、垂直分布図、西壁セクション



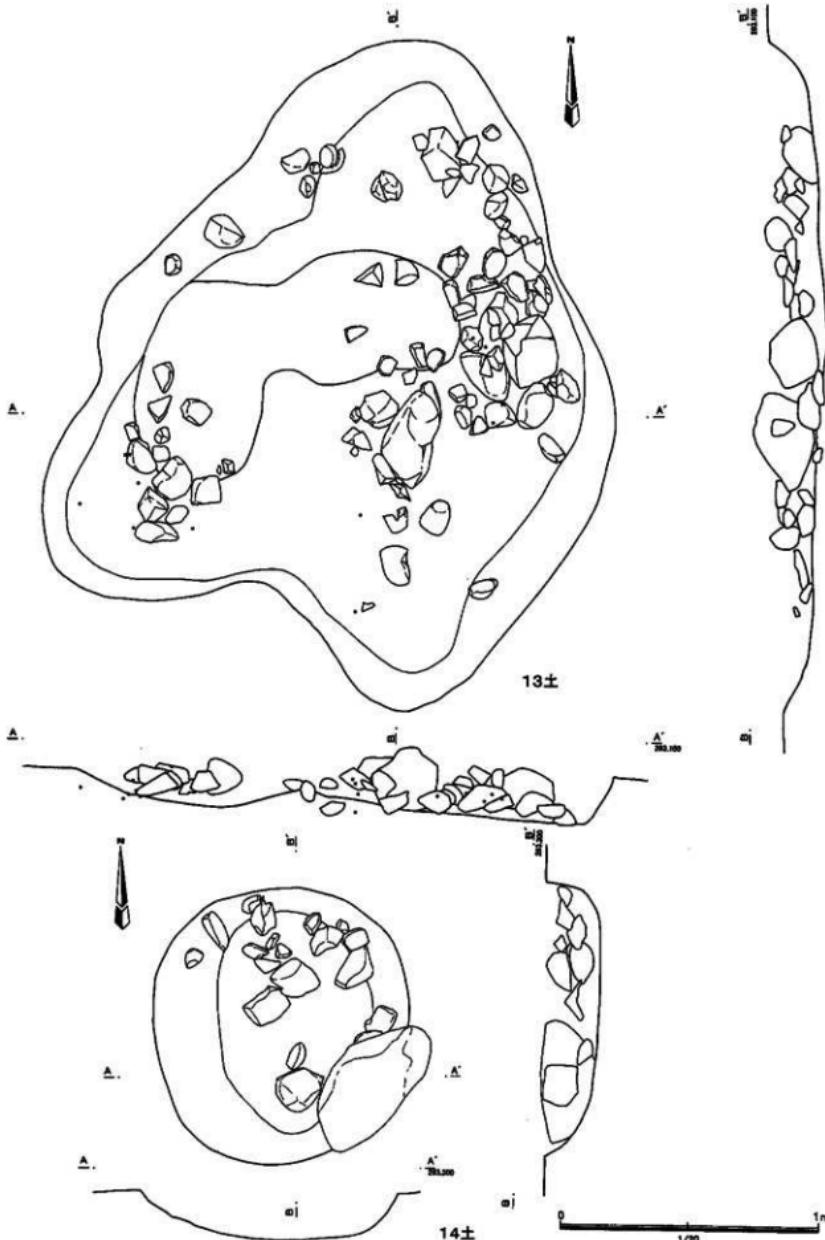
第10図 3区, 1号溝実測図



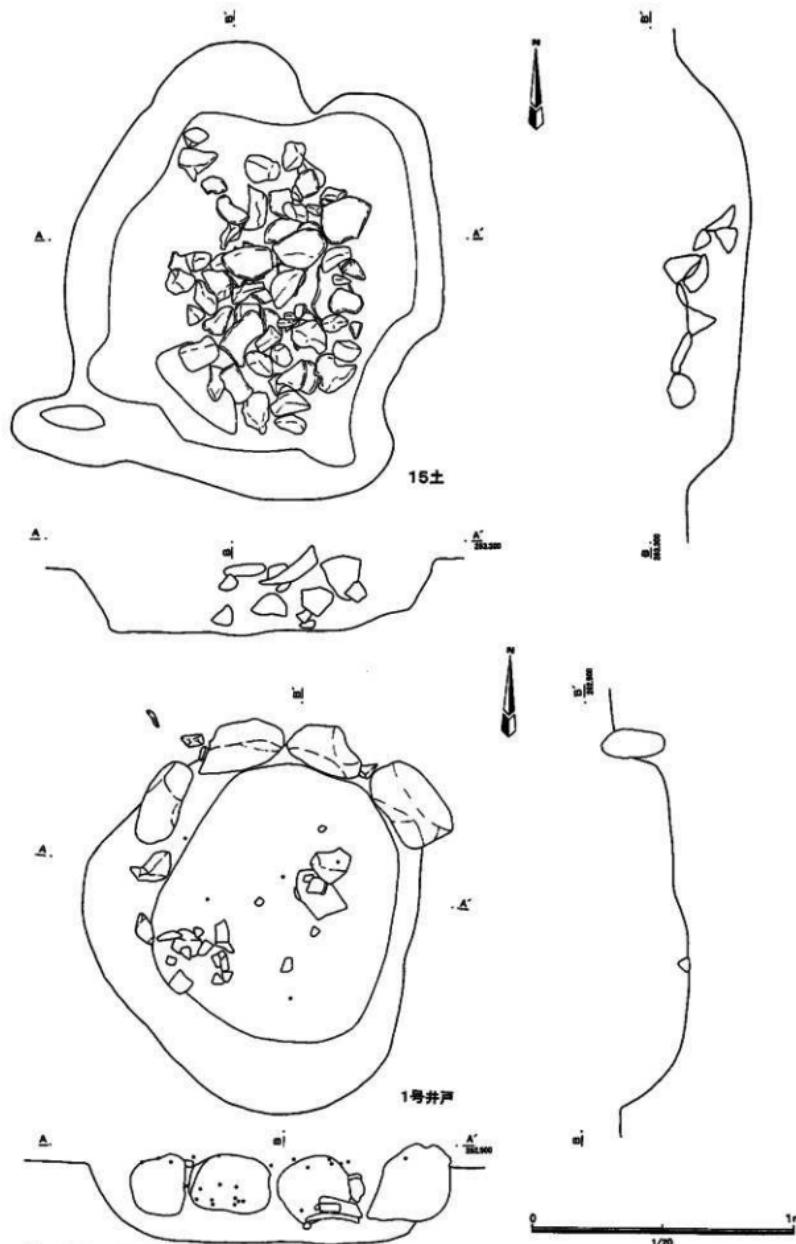
第11図 3区、2号河床実測図



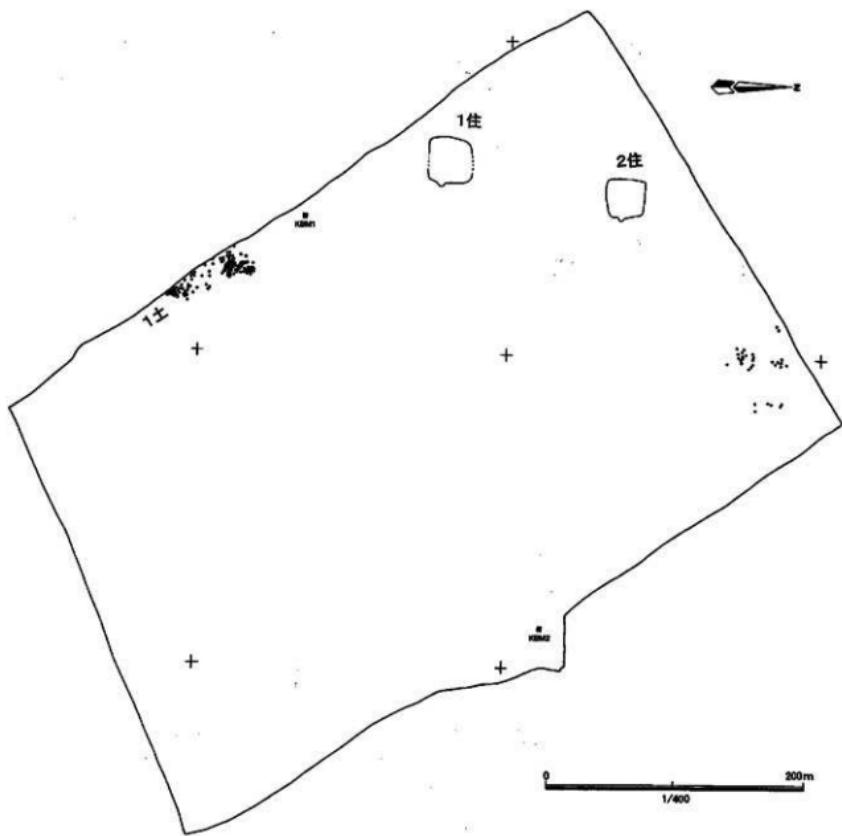
第12図 3区, 1~12号土坑実測図



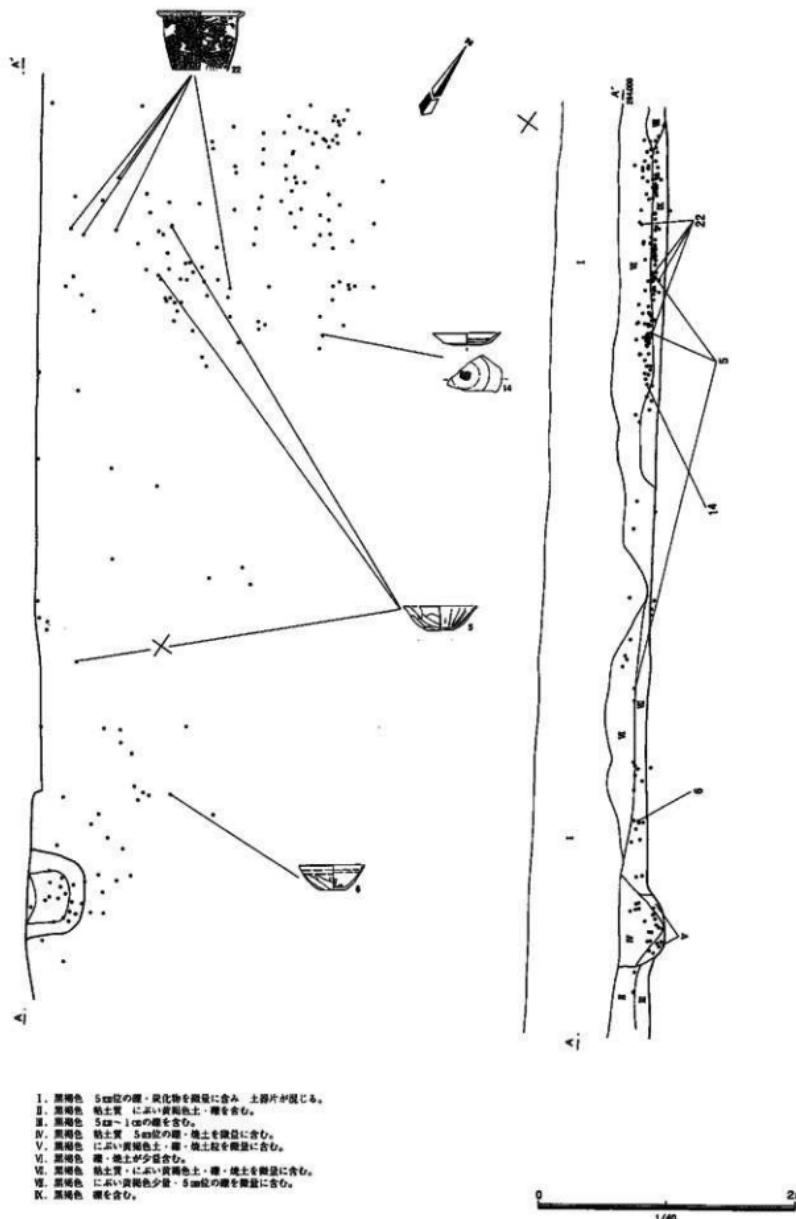
第13図 3区、1号井戸・15号土坑実測図



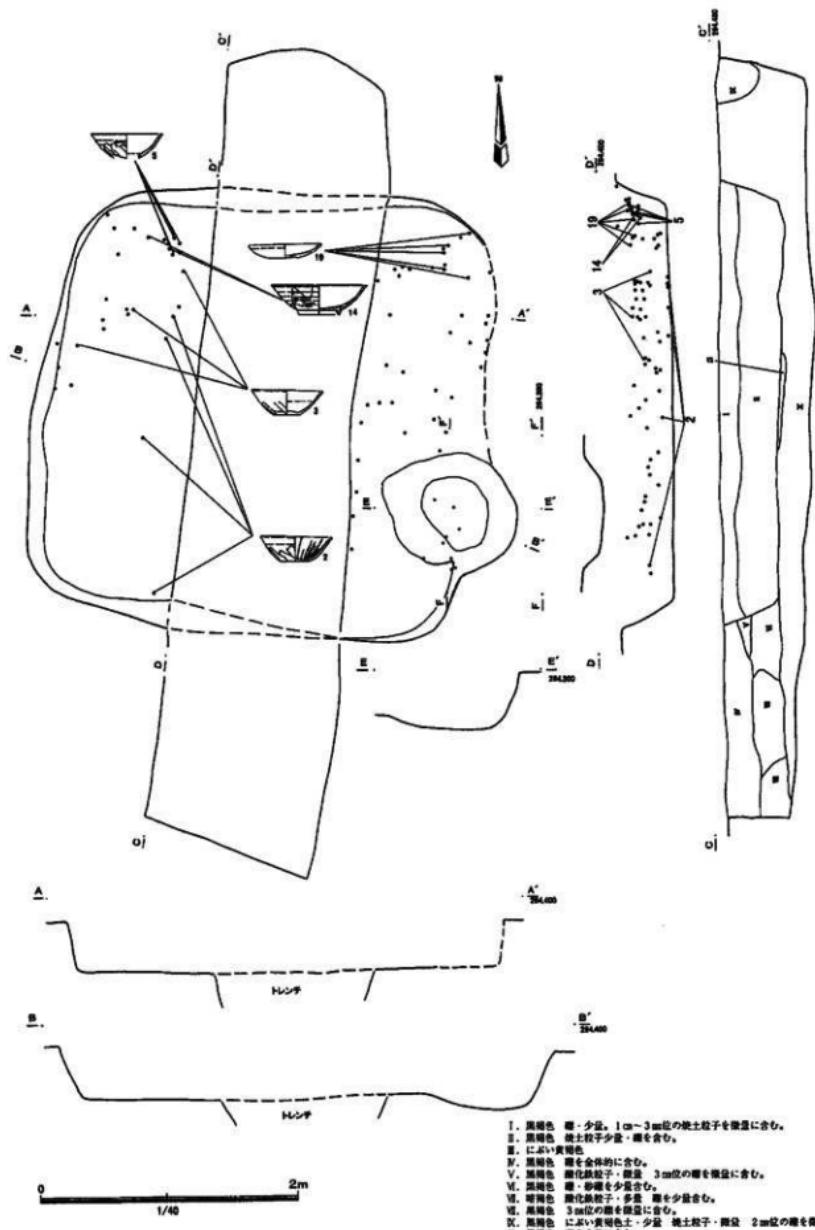
第14図 3区、第13・14号土坑実測図



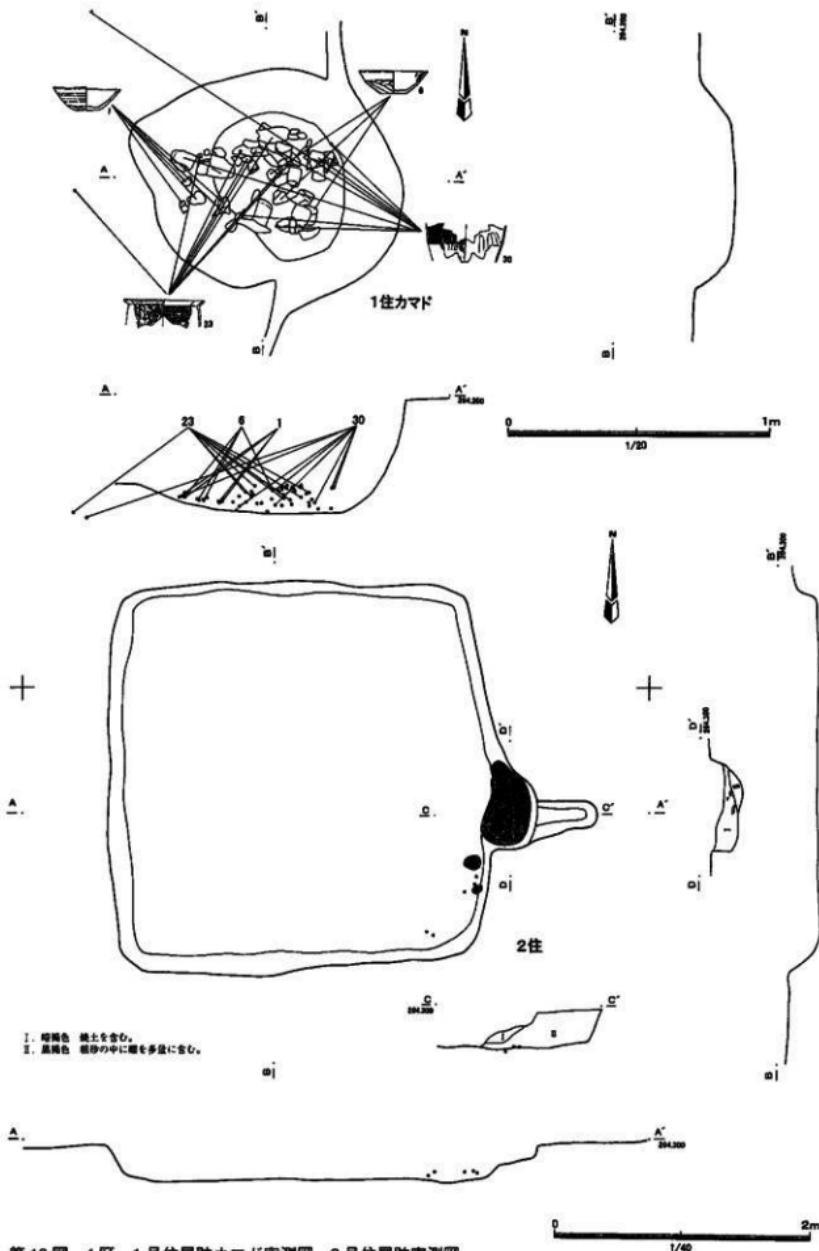
第15図 4区、全体図、遺物・垂直分布図



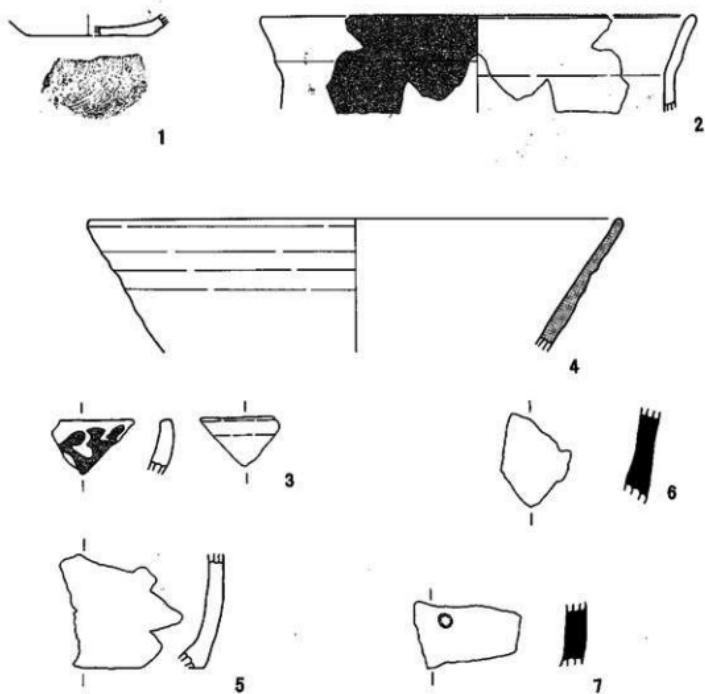
第16図 4区、土器集中区・垂直分布図



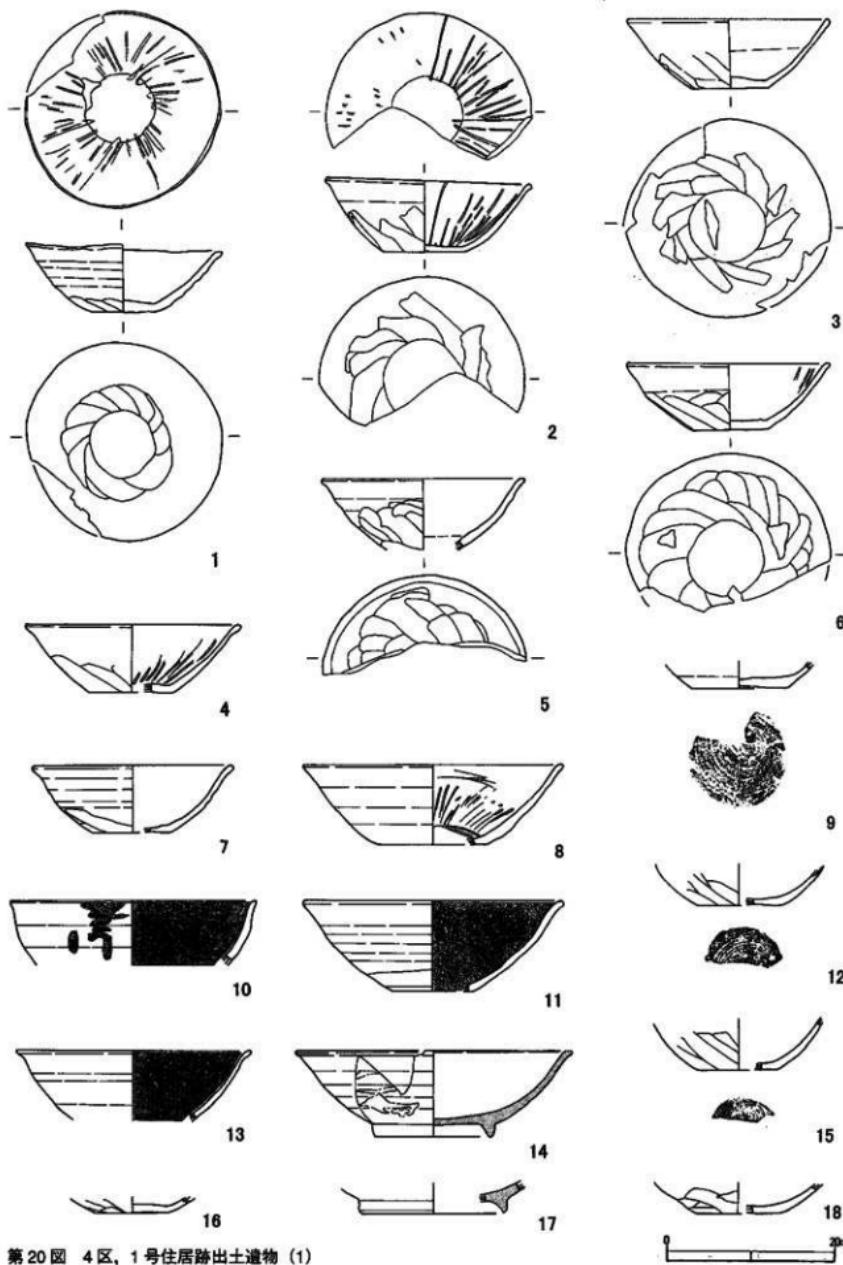
第 17 図 4 区, 1 号住居跡・遺物分布図



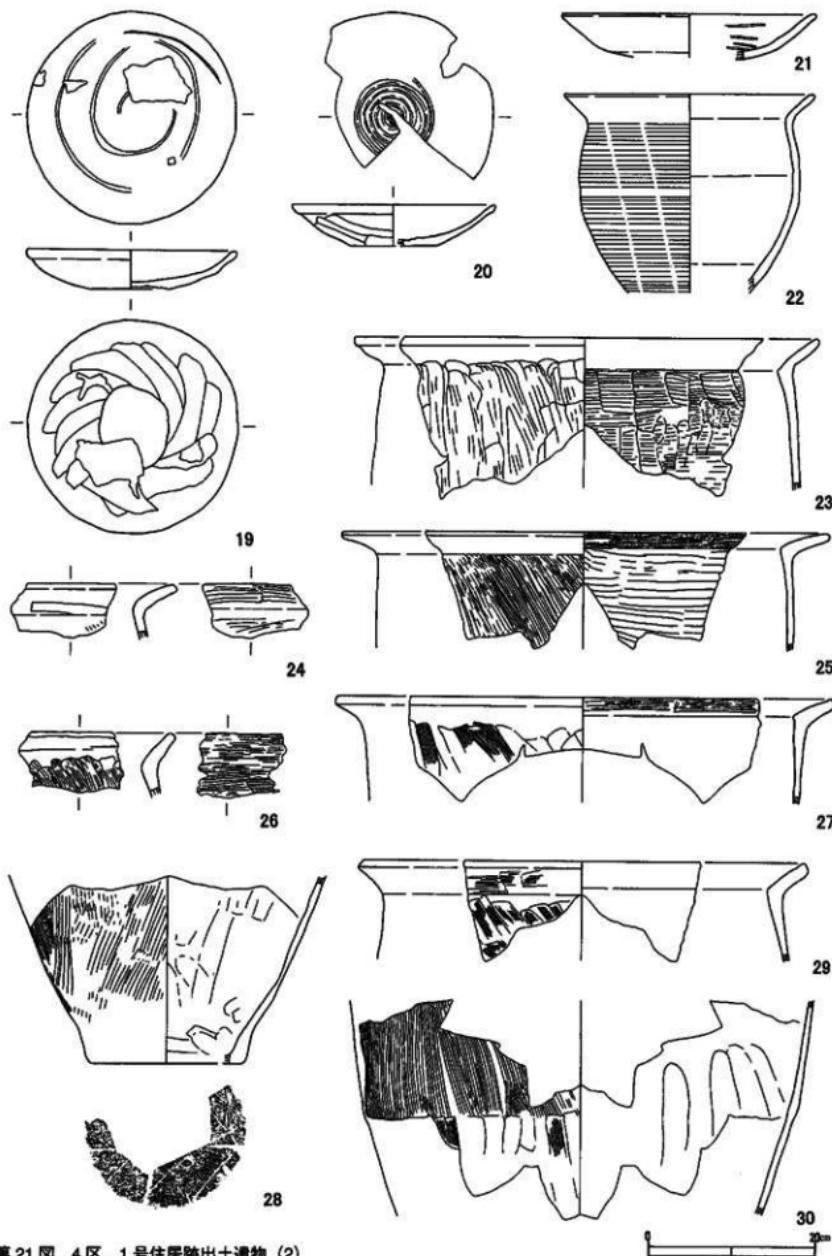
第18図 4区、1号住居跡カマド実測図、2号住居跡実測図



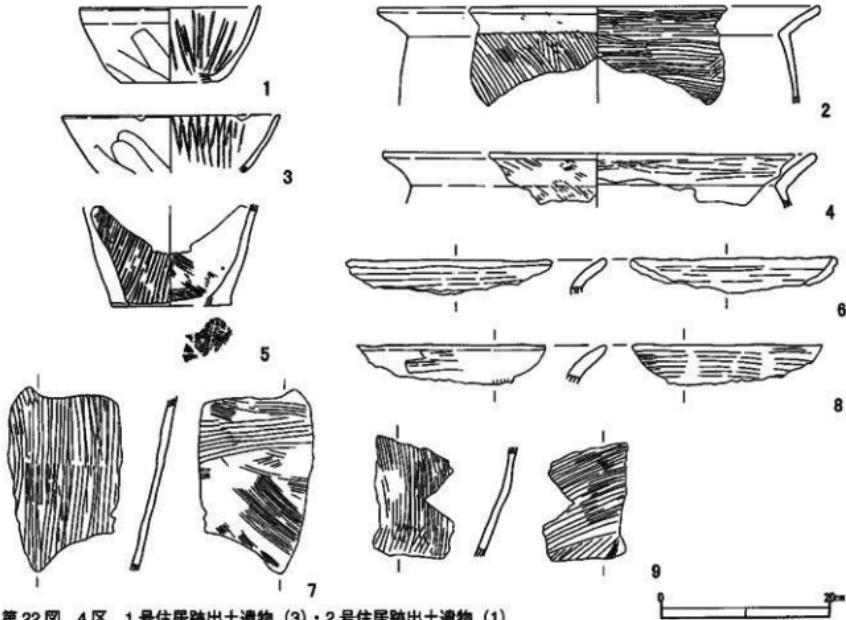
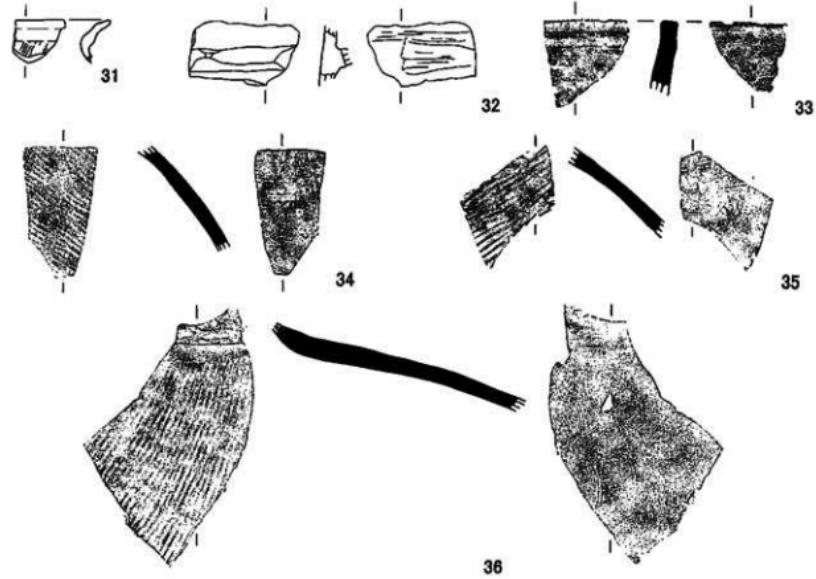
第19図 3区、1号井戸出土遺物



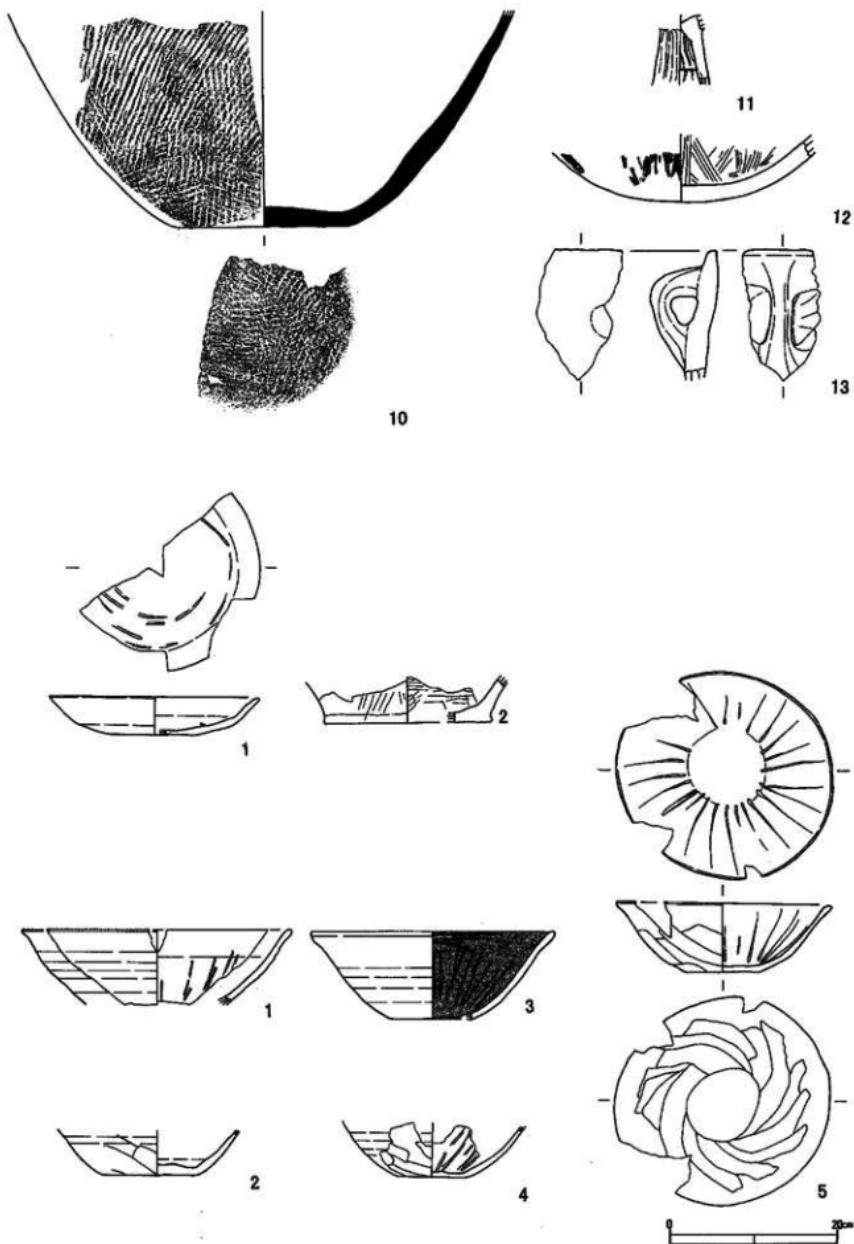
第20図 4区、1号住居跡出土遺物 (1)



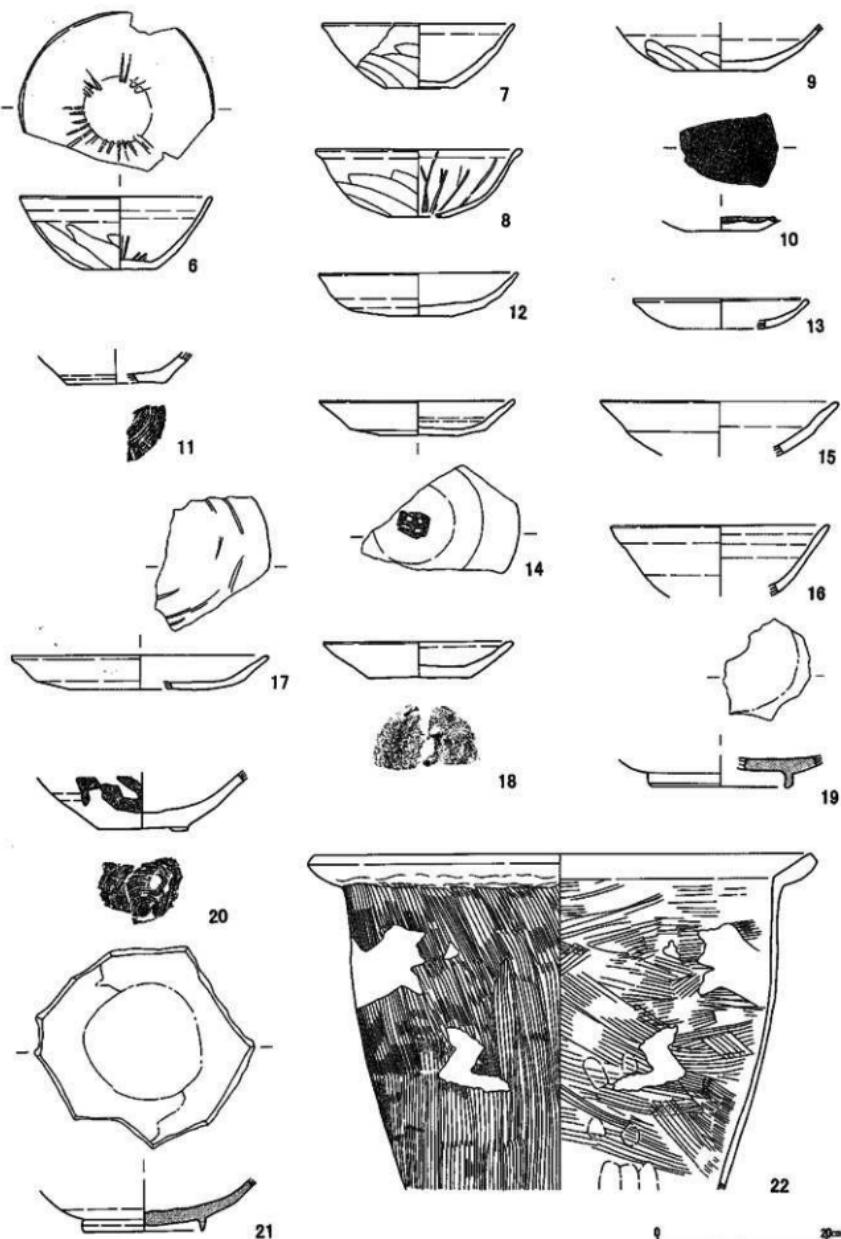
第21図 4区、1号住居跡出土遺物 (2)



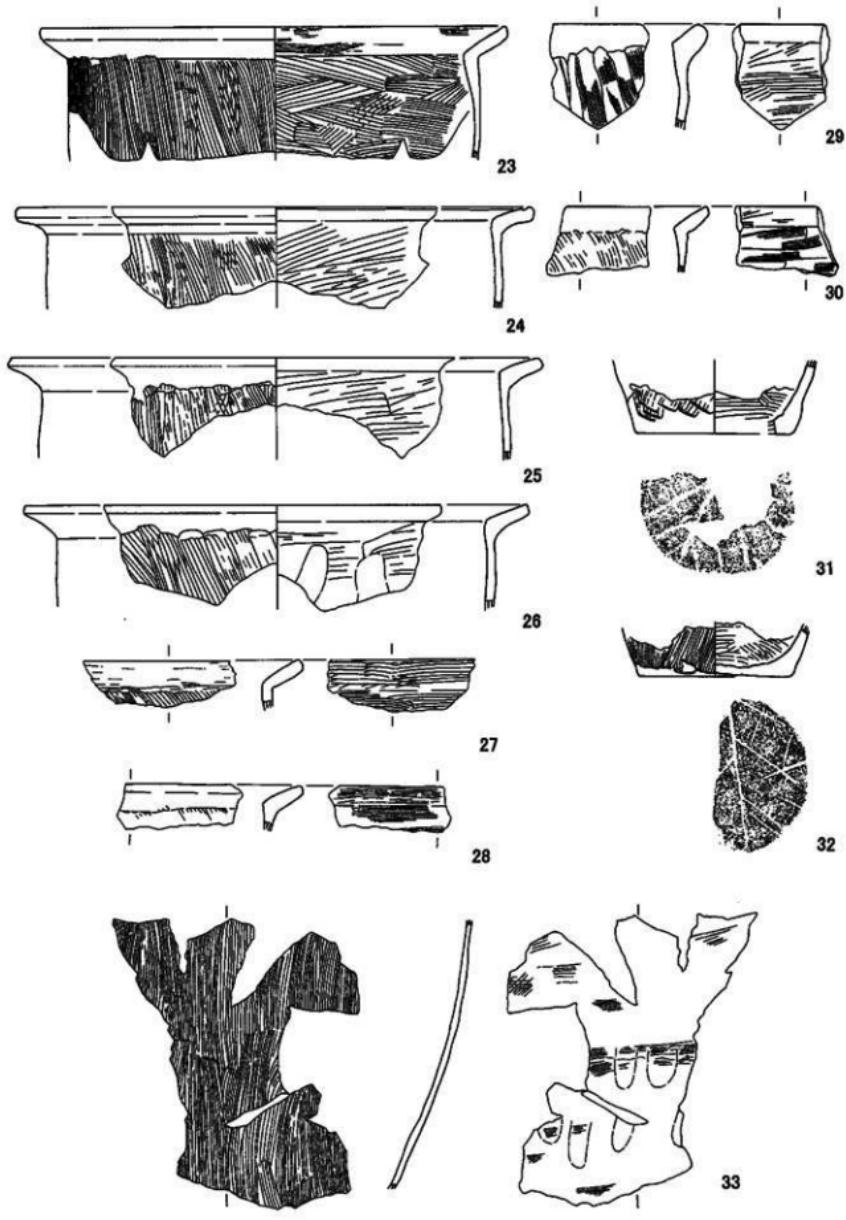
第22図 4区、1号住居跡出土遺物 (3)・2号住居跡出土遺物 (1)



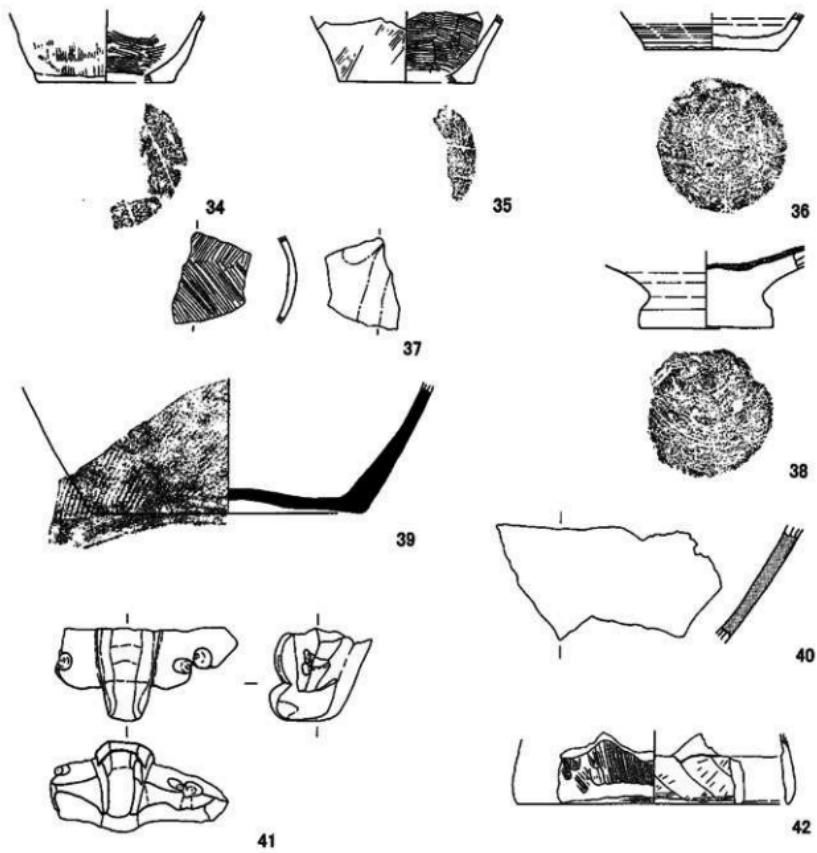
第23図 4区、2号住居跡出土遺物(2)・1号土坑出土遺物・土器集中区出土遺物(1)



第24図 4区、土器集中区出土遺物(2)

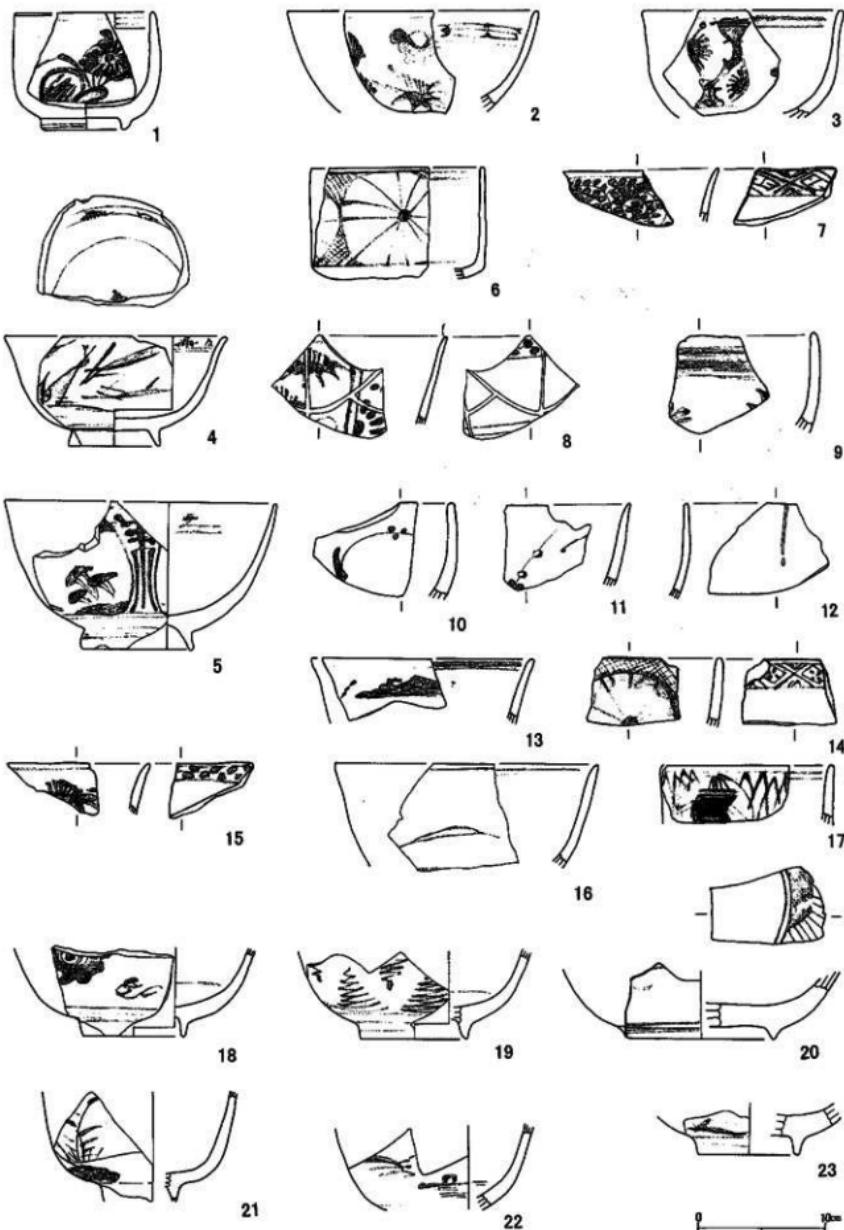


第25図 4区、土器集中区出土遺物(3)

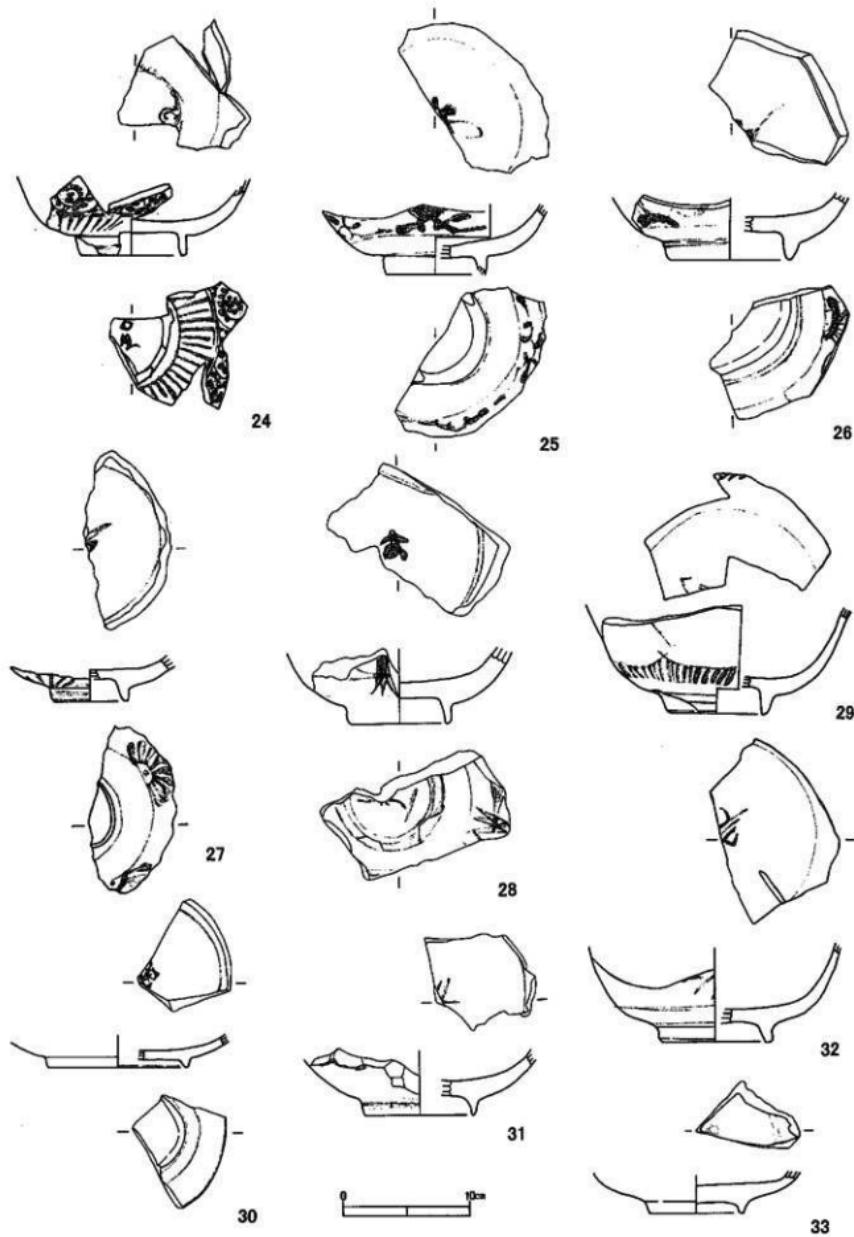


第26図 4区、土器集中区出土遺物 (4)

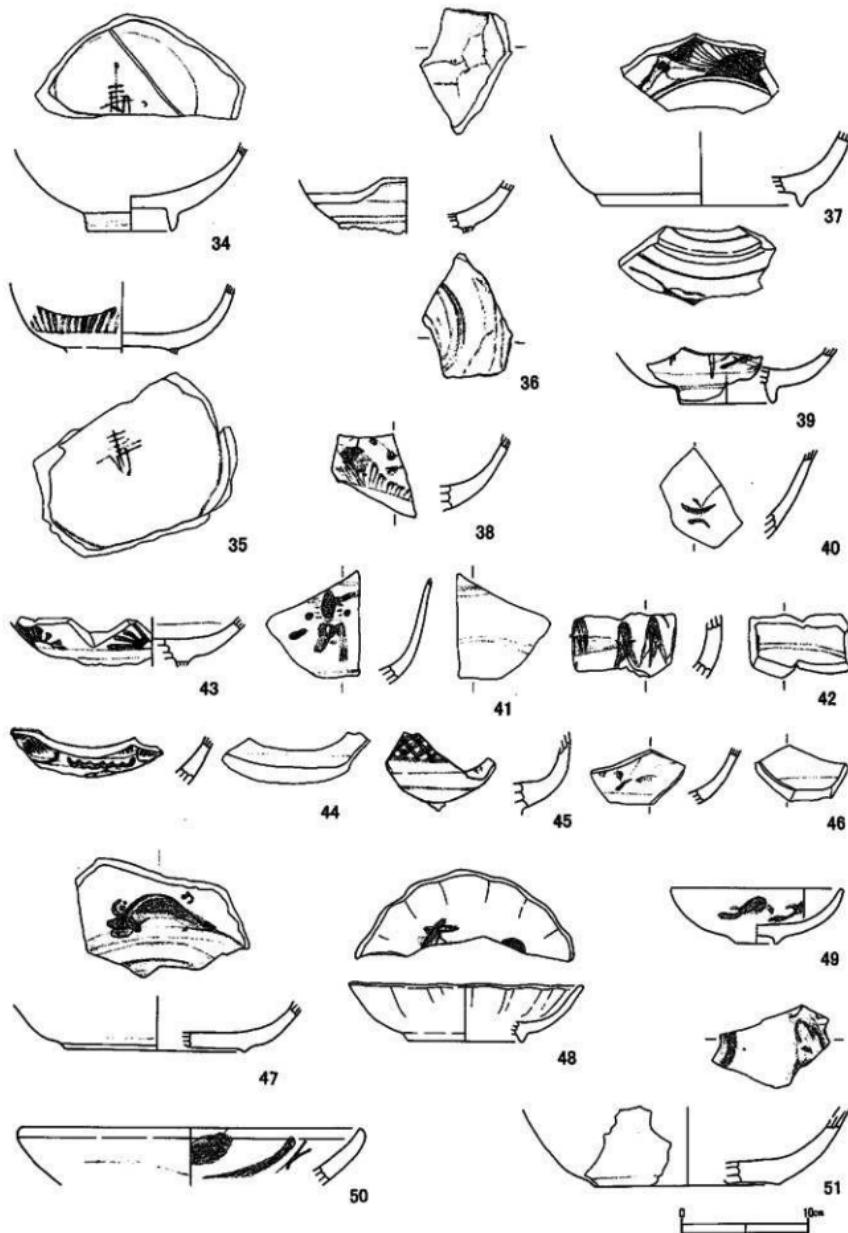




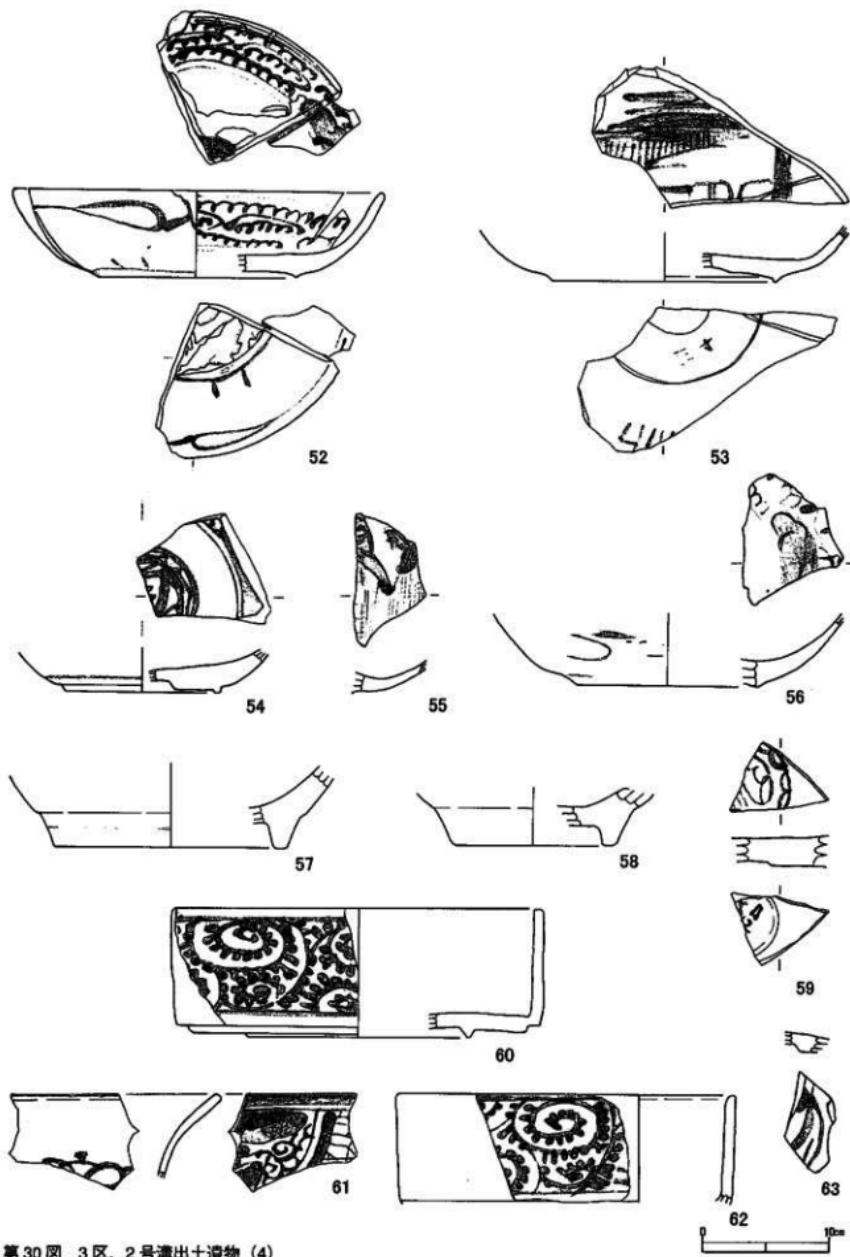
第27図 3区、2号溝出土遺物(1)



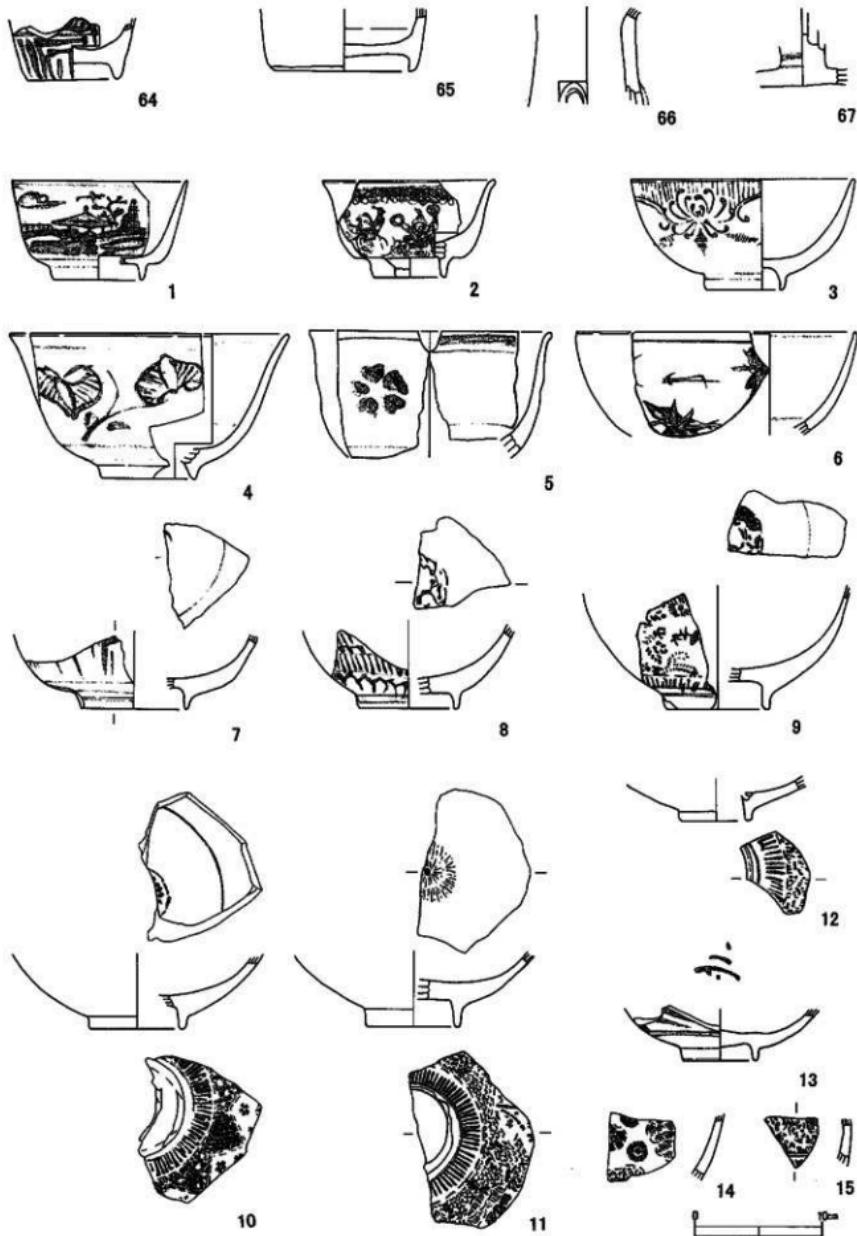
第28図 3区、2号溝出土遺物(2)



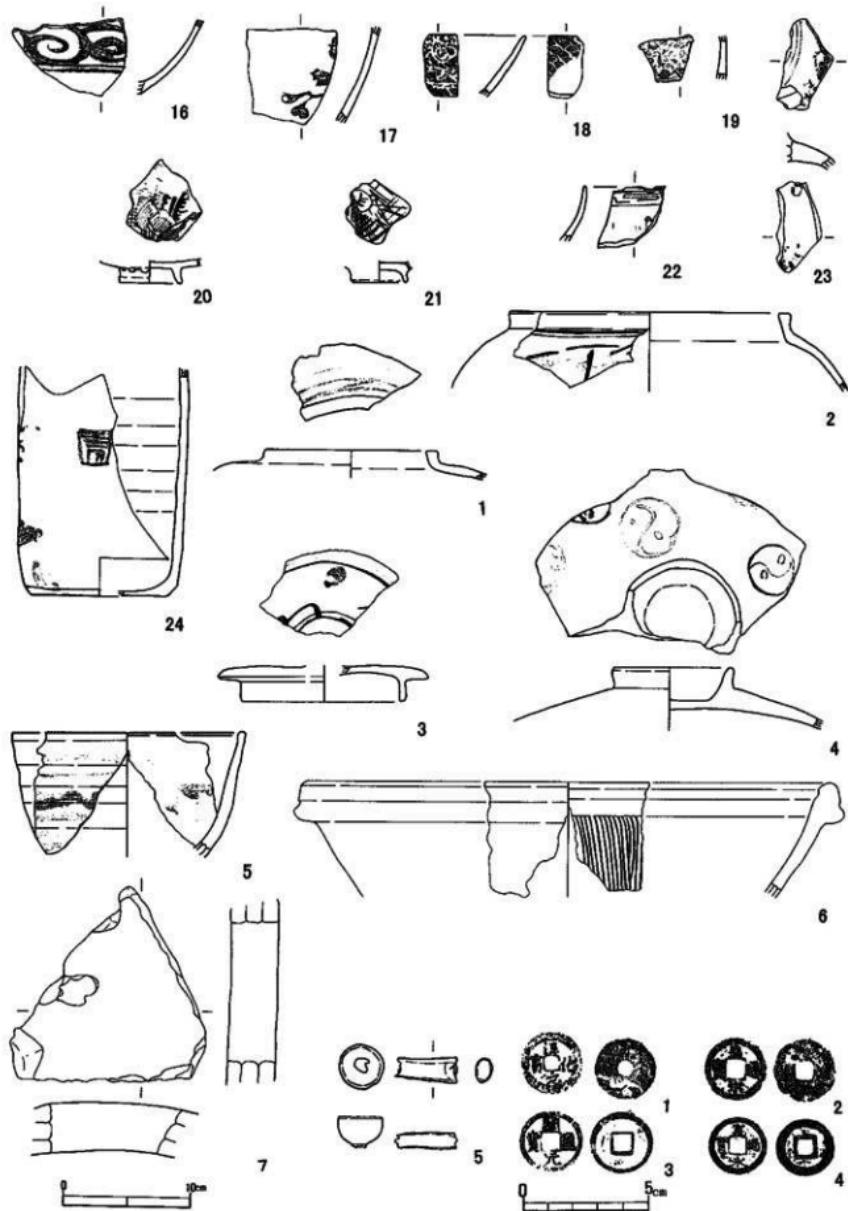
第29図 3区、2号溝出土遺物(3)



第30図 3区、2号清出土遺物 (4)



第31図 3区、2号溝出土遺物 (5)



第32図 3区、2号溝出土遺物 (6)

寺部附・中西遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山梨県中巨摩郡若草町（現：南アルプス市）に所在する寺部附・中西遺跡は、御勅使川扇状地南部の扇端と低地の境界付近に立地している。本遺跡の発掘調査の結果、住居跡や溝状造構、流路、土坑などが検出されている。

本報告では、平安時代の住居跡や石組造構などの覆土の水洗選別により得られた微細遺物を対象に、種類の分類と同定を行い、当該期の植物利用や動物利用などに関する資料を得る。

1. 試料

試料は、平安時代住居跡覆土やカマド内から採取された土壤及び石組造構焼土層の水洗選別により抽出された微細遺物である。これらはプラスチックケースあるいはビニール袋に収められており計178試料ある。同一名の試料も存在することから、分析の便宜上それぞれに仮番号を付し、本文中もこの仮番号を用いて区別している。各試料の詳細は、結果と共に表1に示す。

2. 方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実や炭化材などの植物遺体と動物遺存体を抽出し、以下の項目の同定を行う。なお、これらの種類以外の物質は試料袋に戻し、保存する。

(1)種実遺体

種実遺体を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川、1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか、2000）等との比較から、種類の同定・計数をおこなう。同定後の種実遺体等は種類毎にビンに詰め、乾燥剤を入れ保存する。

(2)炭化材

実体顕微鏡下で炭化材片の組織を観察して、その特徴から種類を同定する。その際に、複数点ある試料については、複数の炭化材を観察して、複数種類か1種類かの確認を行う。実体顕微鏡の倍率では同定不可能な種類全点と同定できた種類から各1点を選択する。選択した試料について、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察する。

(3)動物遺存体

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。同定および解析には金子浩昌氏の協力を得ている。

3. 結果

結果を表1に示す。植物遺体には炭化個体と未炭化個体が認められた。これらについては、分析目的を考慮し、区別して表示した。以下に、検出された植物遺体（種実遺体と炭化材）、動物遺存体の同定結果を記す。

(1)種実遺体同定

炭化種実は木本2種類（モモ、ブドウ属）、草本4種類（イネ、オオムギ、コムギ、アワヒエ）の種実遺体が検出された。未炭化種実は、草本6種類（イネ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ギシギシ属、スペリヒュ）が検出された。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴などを、炭化種実、未炭化種実の順に記す。

<炭化種実>

・モモ (*Prunus persica Batsch*) バラ科サクラ属

核(内果皮)の破片が検出された。完全に炭化しており、黒色。破片の大きさ6mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い溝があり、全体として粗いわし状に見える。完形ならば、広楕円形でやや偏平、先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に窓入した跡がある。一方の側面に縫合線が発達する。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。完全に炭化しており、黒色。広倒卵形、側面観は半広倒卵形。基部の縫合線の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。長さ5mm、径4mm程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は柵状で薄く硬い。

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

胚乳が検出された。完全に炭化しており、黒色。長楕円形でやや偏平。長さ4~6mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。一端に胚が脱落した凹部があり、両面はやや平滑で2~3本の縦溝が認められるなど、遺存状態は比較的良好である。脱殻した米を蒸したり炊いたりして「おこげ」となった場合には、このように明瞭に胚乳の形をとどめることはないと考えられる。おそらく脱殻前の穎に入った生米の状態で、何らかの理由による火熱を受け、炭化した穎は脆く壊れやすいので脱落し、胚乳のみが残存したことが考えられる。

・アワヒエ (*Setaria italica Beauv.-Echinochloa crus-galli Beauv.*) イネ科

胚乳が検出された。完全に炭化しており、黒色。広楕円体でやや偏平。長さ1.8mm、径1.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部に胚の凹みがある。表面には内外穎の一部が付着しているが、遺存状態が悪く種までの同定是不可能であった。

・オオムギ (*Hordeum vulgare L.*) イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。完全に炭化しており、黒色。紡錘状長楕円形で先端部は尖り、基部は丸い。長さ5~7mm、幅3.5mm、厚さ3mm程度。腹面は1本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。

・コムギ (*Triticum aestivum L.*) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。完全に炭化しており、黒色。楕円形で全体的に丸みを帯びている。長さ4~4.5mm、径3~4mm程度。腹面には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。なお、遺存状態が悪く、オオムギとの判別が難しいものはムギ類とした。

<未炭化種実>

・イネ (*Oryza sativa L.*) イネ科イネ属

穎の破片が検出された。淡褐色、長楕円形でやや偏平。長さ6~8mm、幅3~4mm、厚さ2mm程度。基部に特徴的な果実序柄がある。穎は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。

・イネ科 (Gramineae)

穎が検出された。淡褐色、狭卵形でやや偏平。長さ6mm、幅1.8mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背面はやや高く稜がある。先端部は尖り、基部から伸びる逆刺を持つ艶状の腕が残る。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。淡褐色、三稜状倒卵形。長さ1.8mm、径1.2mm程度。先端部はやや尖り、基部は切形。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実が検出された。暗褐色、果実は卵状三稜形。径1mm程度。両端は急に尖り、稜は鋭い。果実を覆う花被は心円形で径2mm程度。大きな網目模様の脈があり、縁に歯牙がある。脈の基部には楕円形のコブ状

突起がつく。

- ・スペリヒュ (*Portulaca oleracea* L.) スペリヒュ科スペリヒュ属

種子が検出された。黒色、腎臓状円形でやや偏平。径 0.6mm 程度。一端が凹み、臍がある。臍には種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が密生する。

(2)炭化材同定

結果を表 1 に示す。分類の結果、43 点が炭化材と判断された。ただし、多くは微細片のため種類の同定が困難な試料や木材組織の観察が不可能な試料であり、これらのうち同定可能な試料は 19 点であった。不明とした試料は、炭化材と判断されるが木材組織の観察が不可能であったものを示している。

19 点の炭化材は、針葉樹 1 種類（マツ属複維管束亞属）と広葉樹 10 種類（ハンノキ属・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ亞属クヌギ節・コナラ属コナラ亞属コナラ節・コナラ属コナラ亞属・クリ近似種・クスノキ科・モモ・サクラ属）に同定された。以下に、各種類の主な解剖学的特徴を記す。

- ・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15 細胞高。

- ・ハンノキ属 (*Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または 2～4 個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30 細胞高。

試料が微細片のため、ハンノキ亞属かヤシャブシ亞属かの区別はできなかった。

- ・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2～4 個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3 細胞幅、1～40 細胞高のものと集合放射組織とがある。

- ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2～3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有する。道管内壁の壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

- ・コナラ属コナラ亞属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は 1～3 列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亞属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は 1～2 列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亞属 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*) ブナ科

環孔材で、複合放射組織を有することから、上記クヌギ節またはコナラ節と考えられる。しかし、残存しているのが早材部（孔圈部）のみで、晩材部の道管配列が観察できなかったため、クヌギ節かコナラ節の区別ができなかった。

- ・クリ近似種 (cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は 1～4 列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高。

試料は微細片であり、組織が類似するコナラ節の可能性もあるため、近似種とした。試料が脆く、電子顕微鏡による観察・写真撮影はできなかった。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った梢円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。木口面で油細胞と考えられる組織が認められる。

試料が微細片で脆いため、柾目および板目の組織観察や電子顕微鏡による観察はできなかった。

・モモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

環孔性散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が4～5列配列し、やや急激に管径を減じた後、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～6細胞幅、1～70細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った梢円形、単独または2～8個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。

木口面の組織配列からサクラ属である。少なくとも上記モモとは道管配列が異なり、異なる種類である。現生標本との比較では、ヤマザクラなどに類似しているが、種類の同定には至らない。サクラ属の試料は、いずれも微細片で電子顕微鏡による観察ができなかった。

(3)動物遺存体同定

試料は、いずれも被熱を受けた微細な骨片であった。これら骨片は、中型の鳥獣類、魚骨、中形獸、マイマイ属殻?に同定された。なお、中形獸については、ムササビ (*Petaurista leucogenys*)、タヌキ (*Nyctereutes procyonoides*)、アナグマ (*Meles meles*) 程度の大きさの獸類が想定される。以下に、各試料の結果を記す。

・仮 No.3

2片の小骨片である。極めて微細であり、詳細は不明である。

・仮 No.4

扁平な細形骨である。中型獸の肢骨片と考えられる。

・仮 No.6

半透明の弾力のある薄い半球状を呈する。マイマイ属の卵殻の可能性がある。

・仮 No.36

6片の小骨片である。獸骨片と考えられる。

・仮 No.40

厚さ 0.77mm を測る。細条溝が片側につく。魚類の鱗棘と考えられる。

・仮 No.83

唯一骨の原形を保っている試料である。魚の椎体で、椎体の関節円板片側のみ残存する。椎体横径 2.37mm を測り、腹面に椎体に平行する3条の薄い骨板が継走し、側面に1条の隆帯が認められる。当試料は、イワシ類の腹椎骨に形態的・大きさともに近似する。この他に、小骨片（鳥骨?片）が認められる。

・仮 No.86

厚さ 1.24mm を測る骨片である。獸骨の四肢骨破片の可能性がある。

・仮 No.90

海綿質からなる骨片である。獸骨としては脆い。鳥類の骨片の可能性がある。

・仮 No.111

厚さ 1.11mm 程度の骨である。中型獸の骨片の可能性がある。

4. 考察

(1)炭化種実からみた植物利用状況

微細遺物の分類・同定の結果、栽培植物とされる種類が検出されている。これらのうち、モモ、イネ、アワ、オオムギ、コムギは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種である（南木, 1991）。モモは、中国

からの渡来種とされ、観賞用の他、果実や核の中にある仁（種子）などが食用、薬用等に広く利用される。特に、山梨県内の他の遺跡からもその種実や木材の検出例があり栽培されていたと考えられ、本遺跡でも種実遺体や炭化材が認められることから、遺跡周辺で栽培されていた可能性がある。

また、穀類のイネ、アワヒエ、オオムギ、コムギは胚乳が食用される。自生していたと考えられるブドウ属は、果実が食用可能な有用植物である。これらの栽培植物を含む有用植物が全て炭化した状態で、動物遺存体などとともに住居跡覆土等から出土した状況を考慮すると、本遺跡近辺で栽培されたものが持ち込まれ利用された痕跡と考えられる。

御勅使川扇状地上や扇端部に立地する遺跡の分析調査例では、百々遺跡の住居跡からはイネ、アワヒエ、オオムギ、コムギ、マメ類、エゴマの炭化種実や、灰化したイネの穎が確認されており（パリノ・サーヴェイ、未公表）、二本柳遺跡で検出された平安時代末の水田面からオニグルミ、モモ、ウメが認められ、さらに、イネ、オオムギ、コムギなどの炭化胚乳も検出されている。山梨県内の古代～中世の遺跡から検出された炭化種実の時代・地域別の詳細な検討結果によれば、甲府盆地ではモモ、イネ、アワヒエ、オオムギ、コムギが出土例、個体数とともに多いことが指摘されている（櫛原、1999）。本遺跡で認められた炭化種実の種類も、周辺の遺跡や山梨県内における傾向と調和していると言える。

一方、炭化種実とともに検出された未炭化種実には、抽水植物のイネ、ホタルイ属の一部、湿性～中生植物のイネ科の一部、カヤツリグサ科の一部、中生植物のギシギシ属、スペリヒュなどの草本類が認められた。これらは、稲作に伴う水田雑草や集落周辺の明るく開けた場所に生育していたものに由来すると考えられる。なお、未炭化種実は、低湿地遺跡など特別な場合を除くと、炭化していない限り種子は残らず、解析に関しては炭化種子以外を除外して考えた方が妥当という意見もある（吉崎、1992）。本分析で検出された種実遺体は、いずれも遺跡周辺に生育していたと考えられるが、遺存状態が良好であり、遺構の埋没過程で混入した可能性もある。そのため、炭化種実と同様に評価してよいか判断が困難であることから、本報告の解析からは除外している。

②炭化材からみた木材利用状況

炭化材は、水洗選別を実施した試料の検出状況から、住居構築材あるいは燃料材などに由来する可能性がある。微細片のために同定不能な試料が多くあったが、針葉樹1種類（マツ属複維管束亞属）と広葉樹10種類（ハンノキ属・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属コナラ亜属・クリ近似種・クスノキ科・モモ・サクラ属）が認められた。

また、仮 No.162 の炭化材には、種類は不明であるが、少なくとも4種類の広葉樹材が確認されている。したがって、実際には上記した種類よりも多くの樹種が利用されていた可能性がある。

栽培植物のモモが検出されたことから、種実だけでなく、木材も利用されていたこと推定される。微細片での検出のため用途の判断はできないが、栽培種を伐採して利用するとは考えにくく、枝払いや成果期を過ぎ収量の落ちた個体の伐採等で得た木材を利用したと考えられる。

本遺跡周辺で実施された分析調査例によれば、御勅使川扇状地扇端部に立地する二本柳遺跡で実施した花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社、2000）や、同扇状地上に立地する百々遺跡で実施した微細植物片の同定結果でも、同様な種類が認められている。したがって、御勅使川扇状地上や扇端部、後背の山地等にこれら種類が生育していたことが推定される。

③動物遺存体からみた動物利用状況

検出された動物遺存体は、マイマイ類や魚類、中型鳥獣類と同定された。マイマイ類は被熱しておらず、遺構廃棄後に混入したものと考えられる。一方、魚類、中型鳥獣類と考えられる骨片は、被熱しており、当時食糧等として利用された残滓と考えられる。特に、イワシ類と考えられる海産魚類が認められた点は注目される。同様な類例は、長野県の芝宮遺跡群や中原遺跡群で認められており（藤原、1999）、本分析結果を考慮すると、当該期には何らかの形で海産魚が搬入されていたことが示唆される。なお、海産魚の搬入・流通経路や変遷については、検出例が少ない点から詳細な検討がなく不明な点が多い。この点については、今後の課題として分析調査例を蓄積し改めて検討したい。

引用文献

- 藤原直人 (1999) 芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の動植物遺体－古代の食生活を考える－。帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集 2 「食の復元－遺構・遺物から何を読みとるか」, p.171-185.
- 石川茂雄 (1994) 原色日本植物種子写真図鑑, 328p., 石川茂雄図鑑刊行委員会。
- 梅原功一 (1999) 炭化穀実から探る食生活－古代～中世を中心に－。「食の復元－遺物・遺跡から何を読みとるか」。帝京大学山梨文化財研究所編, 81-98. 岩田書院。
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 (2000) 日本植物種子図鑑, 642p., 東北大学出版会。
- 南木睦彦 (1991) 栽培植物。「古墳時代の研究 4 生産と流通 I」。石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, p.165-174. 雄山閣。
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (2000) 二本柳遺跡の古環境と木製品の樹種。山梨県埋蔵文化財センター 調査報告書第183号「二本柳遺跡－一般国道52号（甲西バイパス）改築工事・中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査－」, 山梨県埋蔵文化財センター編, 山梨県教育委員会・建設省甲府工事事業所・日本道路公団東京建設局, p.234-249.
- 吉川純子 (2000) 山梨県日本柳遺跡の大型植物化石。山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第183号「二本柳遺跡－一般国道52号（甲西バイパス）改築工事・中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査－」, 山梨県埋蔵文化財センター編, 山梨県教育委員会・建設省甲府工事事業所・日本道路公団東京建設局, p.219-233.
- 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナル, No.355, p.2-14.

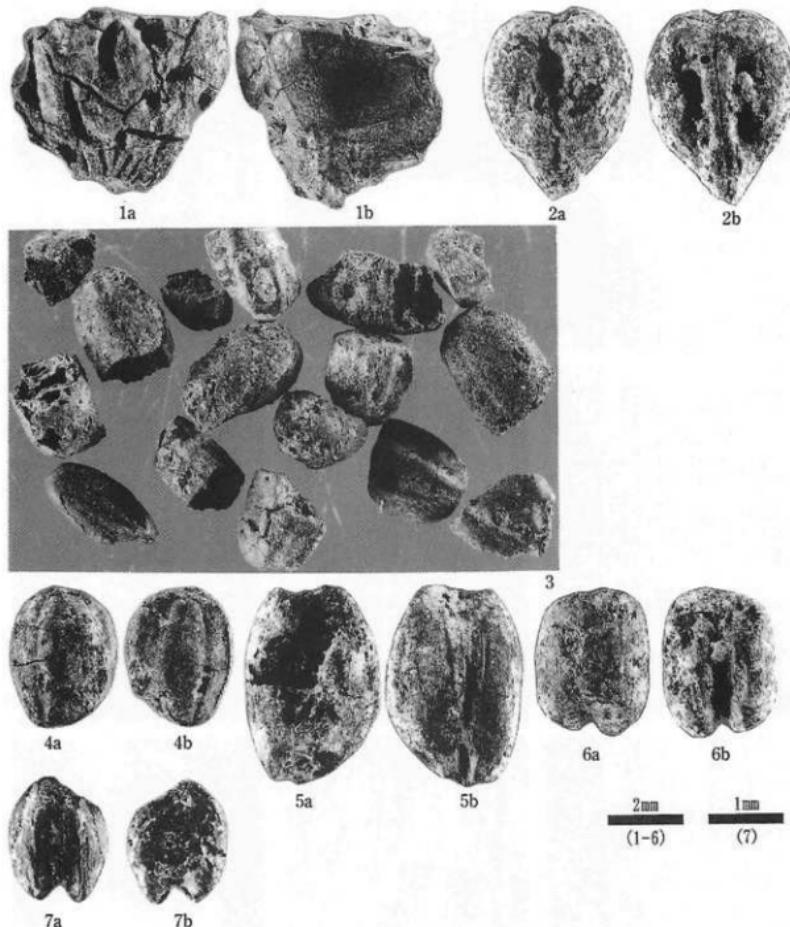
卷之三

表1 费施造物研究结果(2)

表 1 病原微生物同定结果表

「+」は、200個目までの複数を示す。「数字+」は、複数を含む数字以上の複数が想定される複数を示す。

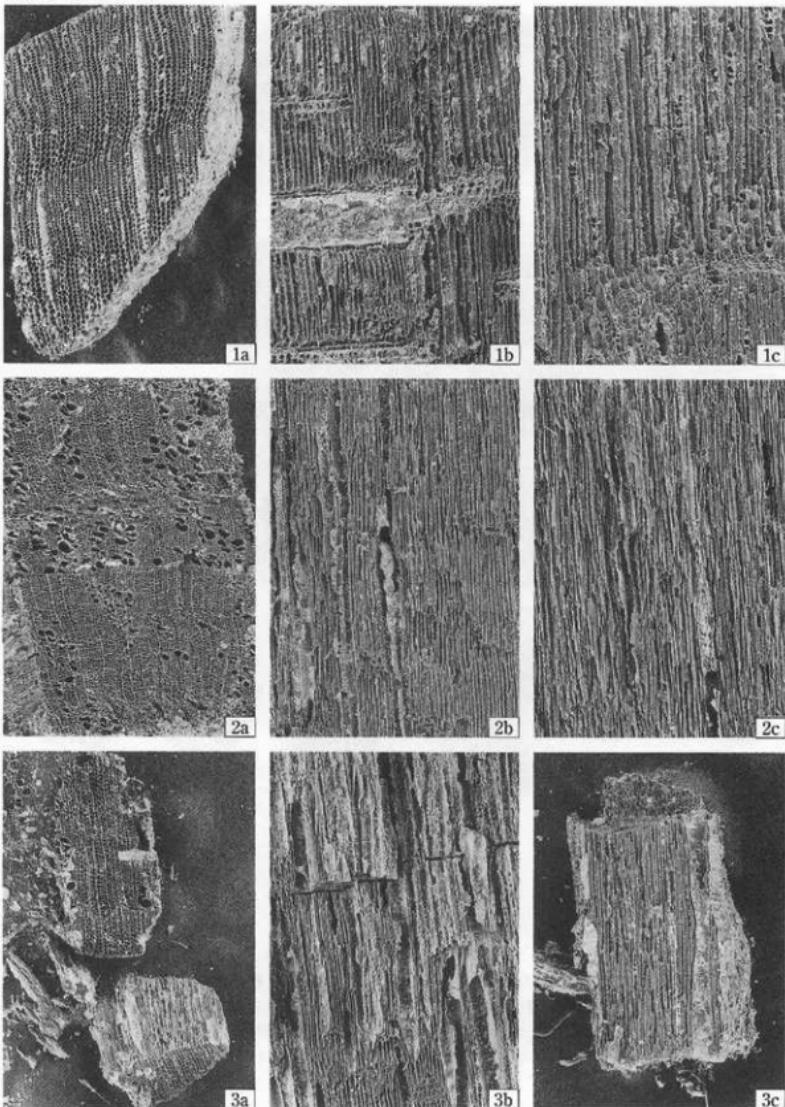
図版1 炭化種実



1. モモ 核(西側住居跡;1住(東)カマド)
3. イネ 胚乳(西側住居跡;土(2層)
5. オオムギ 胚乳(G973 石組焼土)
7. アワーヒエ 胚乳(西側住居跡;カマド1柱)

2. ブドウ属 種子(西側住居跡;西床)
4. イネ 胚乳(西側住居跡;1号柱 カマド焼土)
6. コムギ 胚乳(西側住居跡;西壁2層)

図版2 炭化材(1)



1. マツ属複維管束亜属(仮No.170)

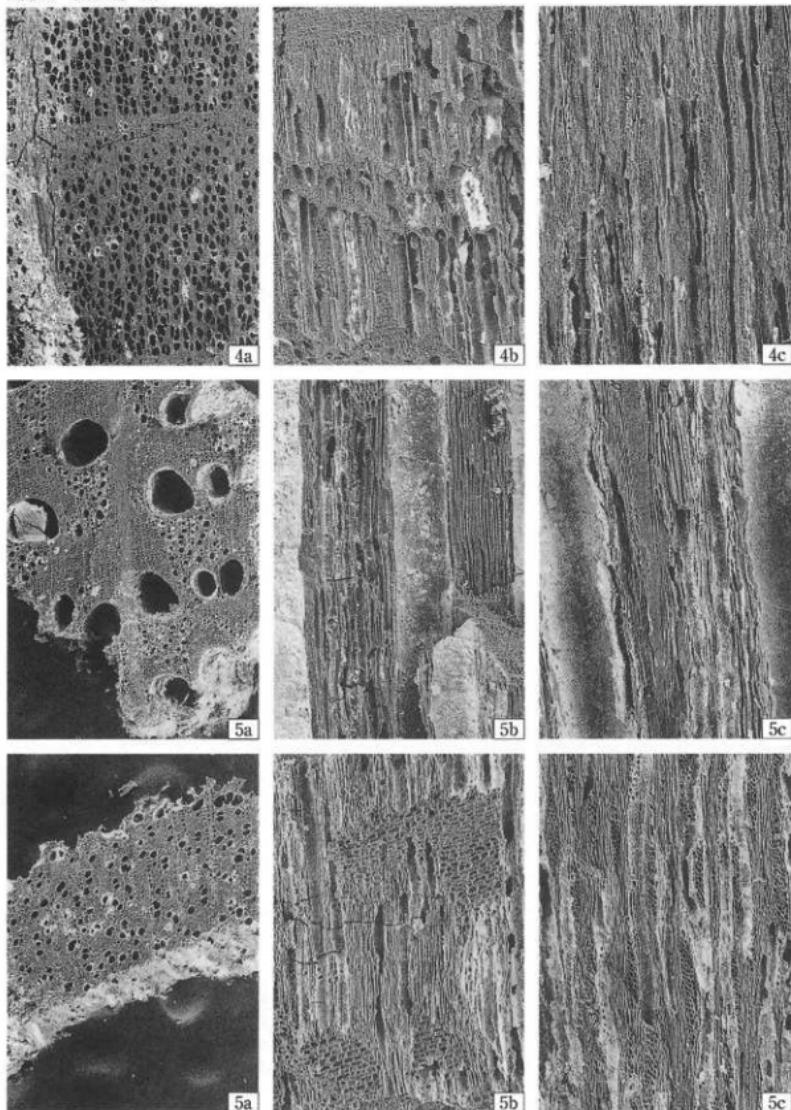
2. ハンノキ属(仮No.153)

3. クマシデ属イヌシデ節(仮No.171)

a:木口, b:径目, c:板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

図版3 炭化材(2)



1. ブナ属(仮 No.3)

2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(仮 No.187)

3. モモ(仮 No.169)

a:木口, b:径目, c:板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

写 真 図 版 ・ 付 編



1区 全景(西から)



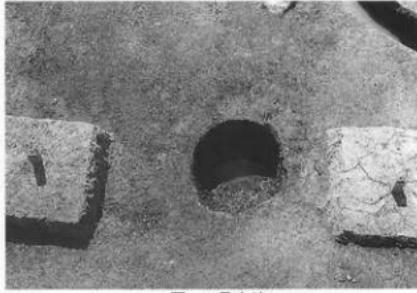
1区 1号土坑



1区 1~5溝、2~4土坑



1区 5号土坑



1区 6号土坑



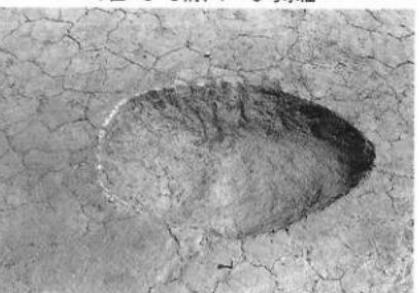
1区 7溝、8号土坑



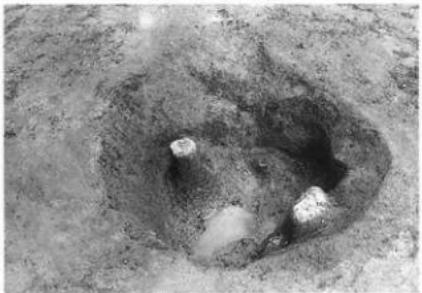
1区 6・8溝、1～3号水澗



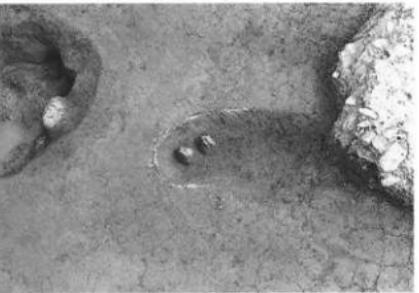
1区 8・9号土坑



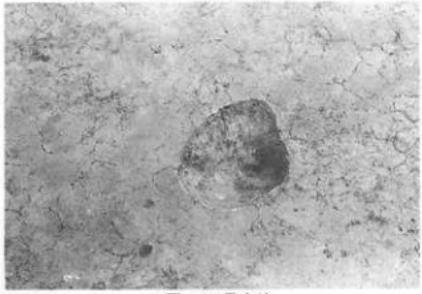
1区 10号土坑



1区 11号土坑



1区 12号土坑



1区 13号土坑



1区 1号水澗



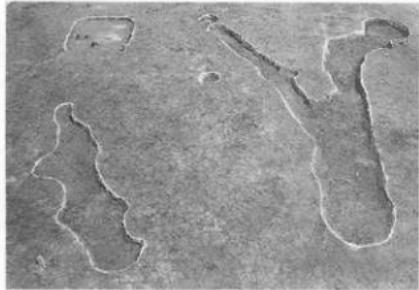
1区 2号水溜



1区 3号水溜



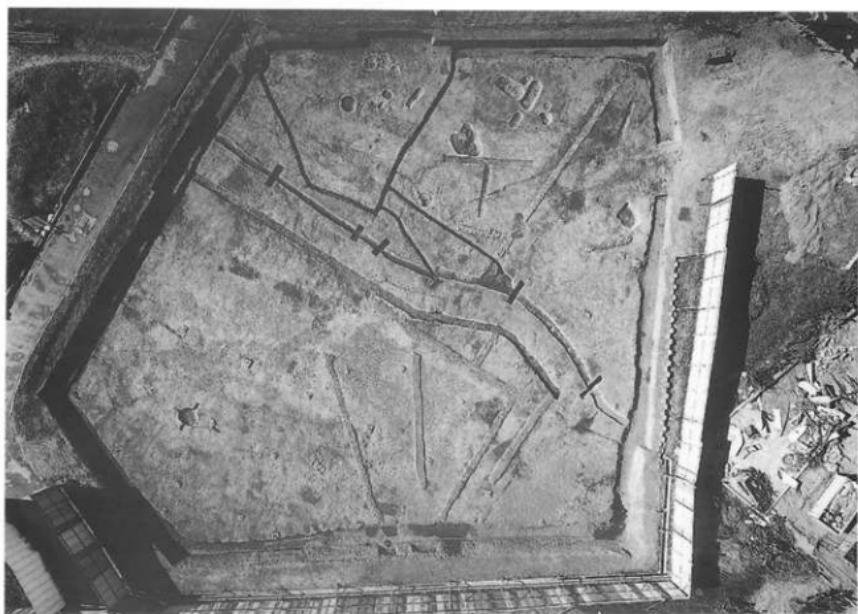
2区 1~4・8号溝、1~3号土坑



図版3 2区 3・4溝、1・2号土坑



2区 5~7溝



3区 全景



图版 4

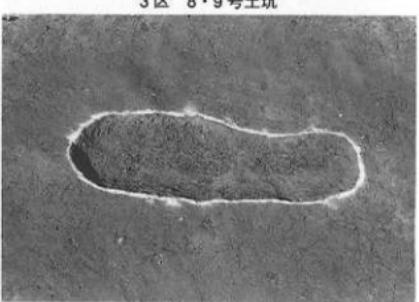
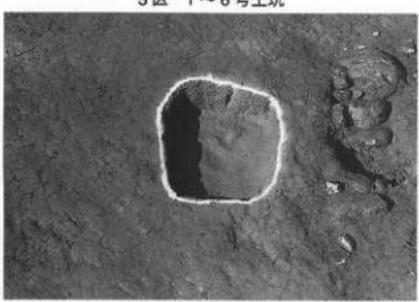
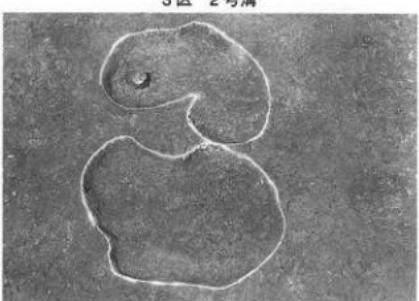
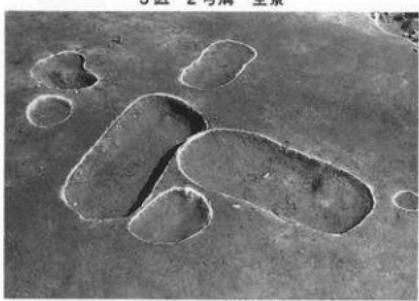
3区 1号溝 全景



3区 1号溝



3区 1号溝





3区 12号土坑



3区 14号土坑



3区 15号土坑



3区 1号井戸



4区 全景



4区 1号住居跡



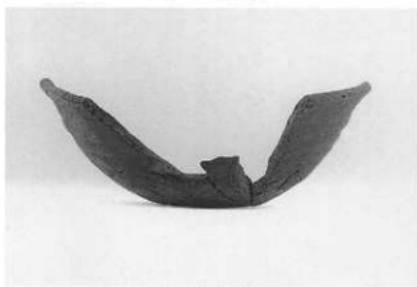
4区 2号住居跡



4区 1号土坑



4区 1号住居跡



4区 1号住居跡



4区 1号住居跡



4区 1号住居跡



4区 1号住居跡



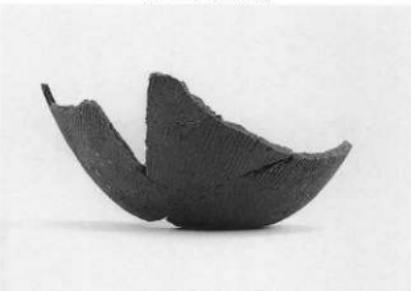
4区 1号住居跡



4区 1号住居跡



4区 2号住居跡



4区 2号住居跡



4区 2号住居跡



4区 2号住居跡



4区 2号住居跡



4区 2号住居跡



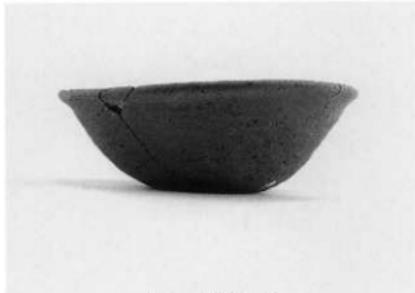
4区 2号住居跡



4区 1号土坑



4区 土器集中区



4区 土器集中区



4区 土器集中区



4区 土器集中区



4区 土器集中区



4区 土器集中区



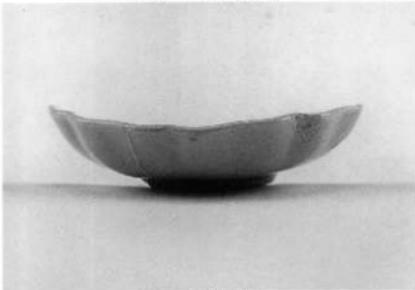
3区 2号溝出土



3区 2号溝出土



3区 2号溝出土



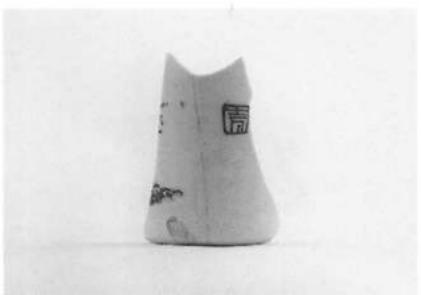
3区 2号溝出土



3区 2号溝出土



3区 2号溝出土



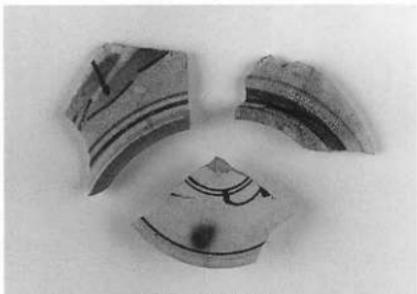
3区 2号溝出土



3区 2号溝出土



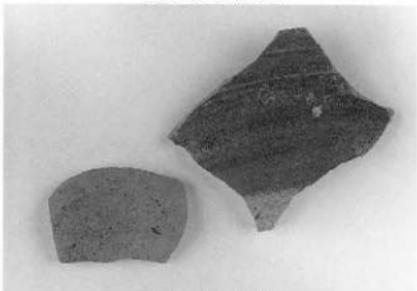
3区 2号溝出土



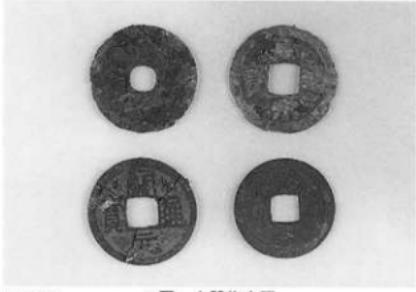
3区 2号溝出土



3区 2号溝出土



3区 2号溝出土



3区 土器集中区



3区 土器集中区

報告書抄録

ふりがな	てらべむらつきだいきゅう・なかにしだいさんいせき
書名	寺部村附第9・中西第3遺跡
副書名	新山梨環状道路建設に伴う発掘調査報告書
卷次	(全1冊)
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第218集
著者名	小林広和・猪股一弘
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根 923 TEL. 055-266-3016
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
発行日	2004年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	(新)	(新)			
寺部村附第9・中西第3遺跡	山梨県南アルプス市 寺部地内	19208	WK30 WK38	35° 36° 42°	138° 29° 35°	2001 (H13) 年 8月 20日 ~ 10月 15日 2002 (H14) 年 7月 1日 ~ 2003 (H15) 年 1月 31日	約 8000m ²	新山梨環状 道路建設に 伴う発掘 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺部村附第9・中西第3遺跡	集落	平安時代～近代	溝(用水路含む) 18 堅穴住居跡 2 土坑 31 井戸 1 水溜 3 土器集中区 1	土器・須恵器 陶磁器類・銭貨 炭化物	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第218集

2004年3月25日 印刷

2004年3月31日 発行

寺部村附第9・中西第3遺跡

—新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書—

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根 923

TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

山梨県土木部

印刷 株式会社 アド井上

